

平成三十四年十月二十八日(日)

第四三二回 史跡めぐり

爽やかな秋

元荒川沿いを散策

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四三一回 史跡めぐり

爽やかな秋 元荒川沿いを歩く  
名跡寺院のかずかずと末田須賀堰

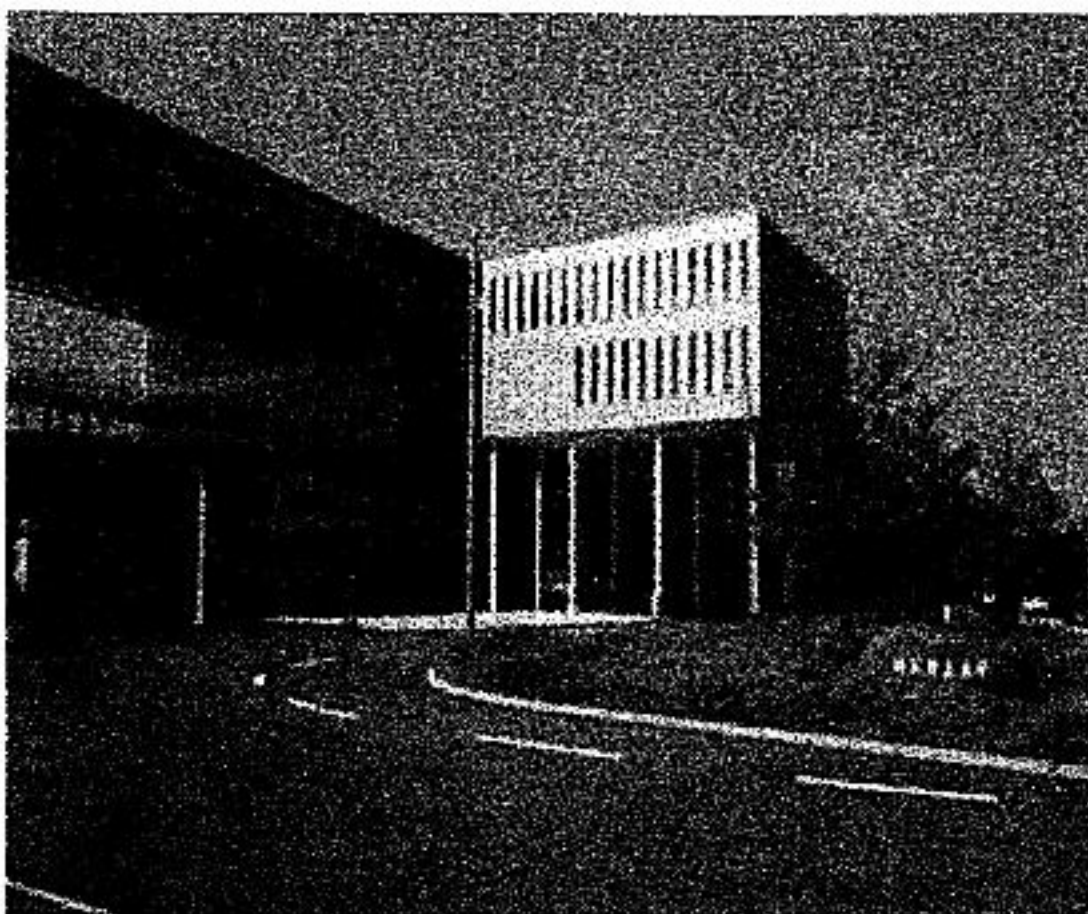
- 日時 平成二十四年十月二十八日(日)
- 集合 午前九時 せんげん台駅西口
- 昼食 弁当持参
- 参加費 一、五〇〇円 (交通費・見学所謝礼・保険料・資料代など)
- 案内者 常任理事 篠原陸郎

コース

せんげん台駅→(バス)→県立大学  
(以下徒歩約5km)

- **一乗院**  
・越谷御殿を偲ぶ建具
  - **三野宮香取神社**  
・三ノ宮卯之助の里
  - **浄山寺**  
・巨大な鰐口  
・地藏尊を特別拝観
- 昼食 浄山寺「耕雲閣」にて ——
- **金剛院**  
・仁王門と金剛力士像
  - **末田須賀堰**  
・須賀用水と末田大用水の溜井
  - **大戸の第六天**  
・武蔵国第六天

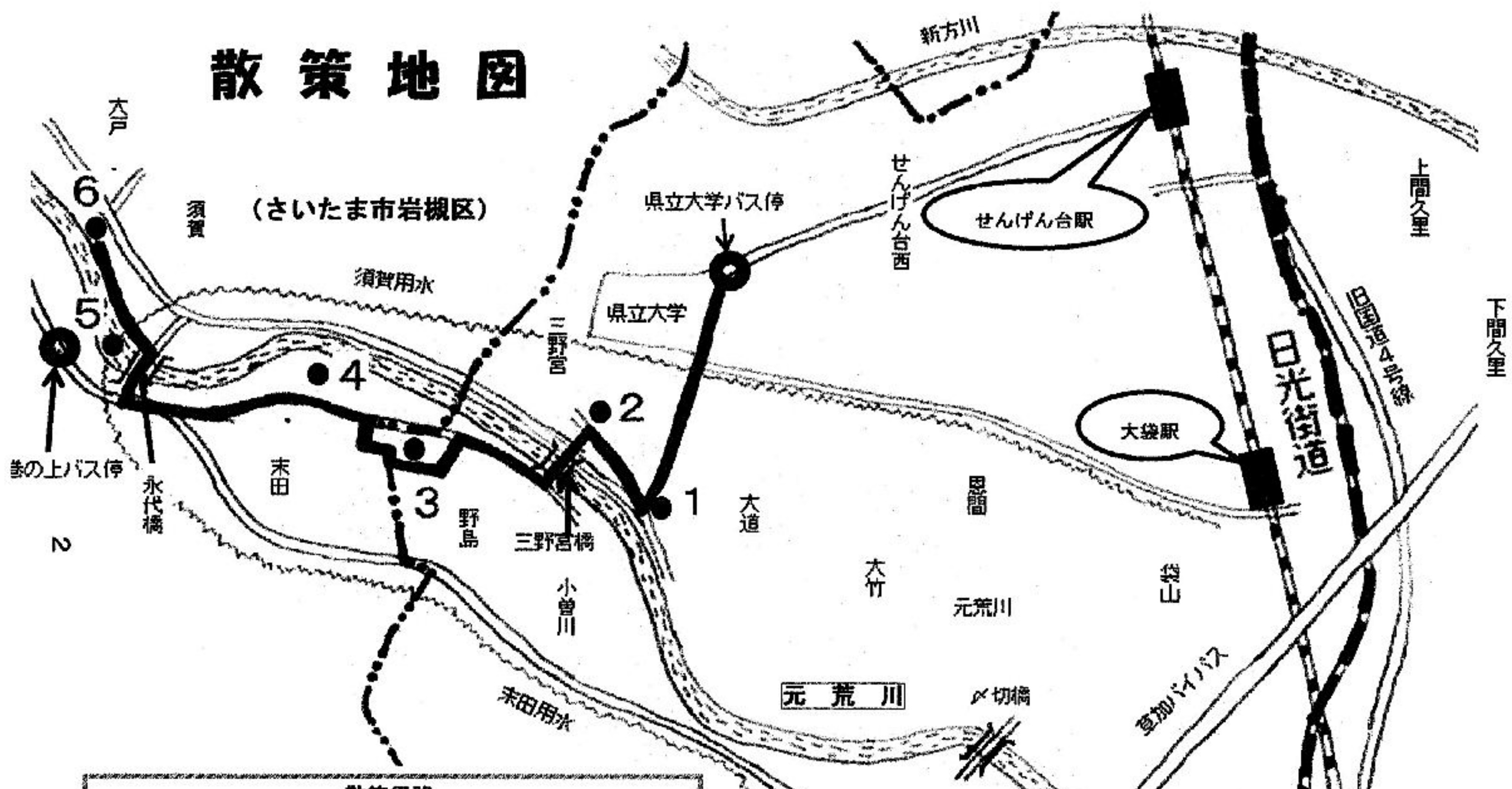
巻の上バス停→(バス)→越谷駅  
[帰着PM3:30頃]





埼玉県立大学

1999年に設置。  
4年制「保健医療福祉学部」と「大学院」、  
学部看護・理学療法・作業療法・社会福祉・  
健康開発の5学科、大学院に保健医療福祉  
学研究科  
設立当初、旧県立衛生短大を引き継いだ短  
期大学部が設置されたが、2008年廃止さ  
れた。  
設計者は山本理顕(りけん)、1999年度グッ  
ドデザイン賞金賞受賞。  
施工大林組。  
「相棒」「仮面ライダー」などのロケ地など  
に使用。

# 散策地図



- 散策経路**
- |           |                      |
|-----------|----------------------|
| (県立大学バス停) |                      |
| 1 一乗院     | 4 金剛院                |
| 2 三野宮香取神社 | 5 末田須賀堰              |
| 3 浄山寺     | 6 大戸の第六天<br>(巻の上バス停) |

 散策経路  
 市境



# 地名の由来

## 元荒川右岸 江戸時代武蔵国

### 野島村

野島の「シマ」は水に囲まれた島ということではなく、耕地をさすといわれ、野の中の耕地ということからおこった地名のようである。

### 小曾川

小曾川の「ソ」は石、つまり砂という意味があるようです。また「カワ」は側、すなわちそばとも解されるので砂地のそばの地ということからつけられたようである。事実、元荒川べりの小曾川は砂をふくんだ一面の畑地である。

### 砂原村

小曾川と同じく砂地の地から砂原と呼ばれたようである。

### 荻島村

荻島の地名は、荻島の「シマ」が耕地をさすといわれるので、元荒川べりの荻（水辺に生える芦の一種、すすきに似た花をつける）の茂った所の耕地とも解される。

## 元荒川左岸 江戸時代下総国（袋山村は昔元荒川の右岸で武蔵国）

### 三野宮村

一説によると、元仁元年（一一二四）源頼朝の妻政子がここに稲荷山一乗院という寺を建てたと伝える。その後、応永十一年（一四〇四）、時の將軍足利義満の三男である三の宮がなくなった。そのとき三の宮稲荷大明神をここにまつたことから、この地を三の宮と呼んだという。（江戸時代は岩槻藩）

### 大道村

この地名はよくわからない。あるいは古い頃立派な街道がここを通っていたかもしれない。（江戸時代は岩槻藩）

### 大竹村

大竹の地名はおそらく孟宗竹のような大竹が茂っていたことから名付けられたものか。（江戸時代は岩槻藩）

### 袋山村

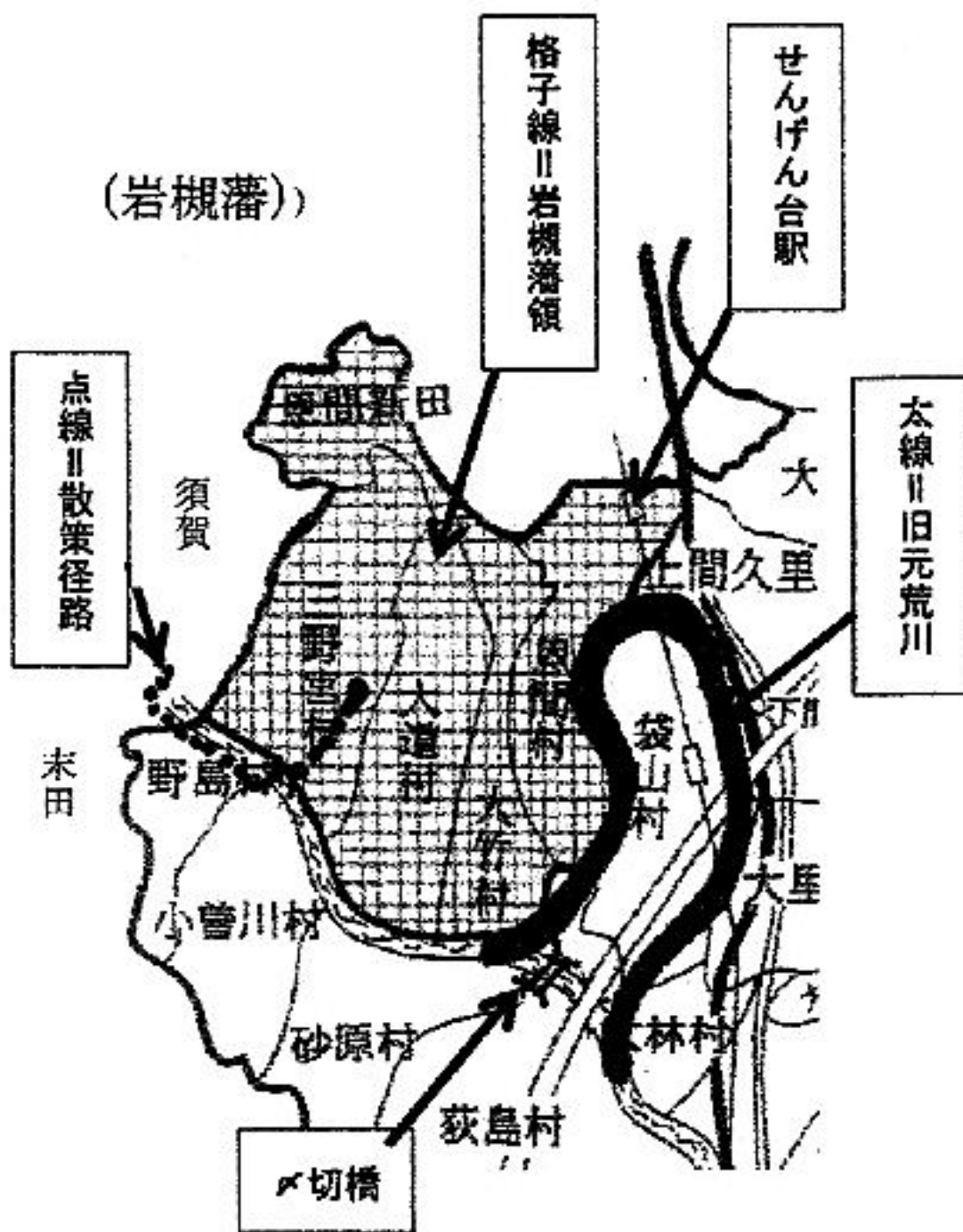
元荒川が袋のような形でこの地を囲むようになっていたことと、この地に積み重ねられた川砂が山のように高くなっていったことから、袋の山と呼ばれた。

### 恩間

もと袋山とは元荒川を隔てた対岸の地にあつたが、今は地続きの地である。古くは「忍間」とも書かれ「おま」とも呼ばれていた。この地名は、元荒川が押し廻している地ということと「おしま」といわれたが、いつか「おんま」とよぶようになった。この地は古くから開けた地で、鎌倉時代の金沢称名寺文書の中に「新方のうちおま」の名がみられる。

### 恩間新田

恩間の地には、国学者渡辺荒陽が出た旧家渡辺家があり、恩間新田はこの渡辺家の先祖が開発した地といわれている。

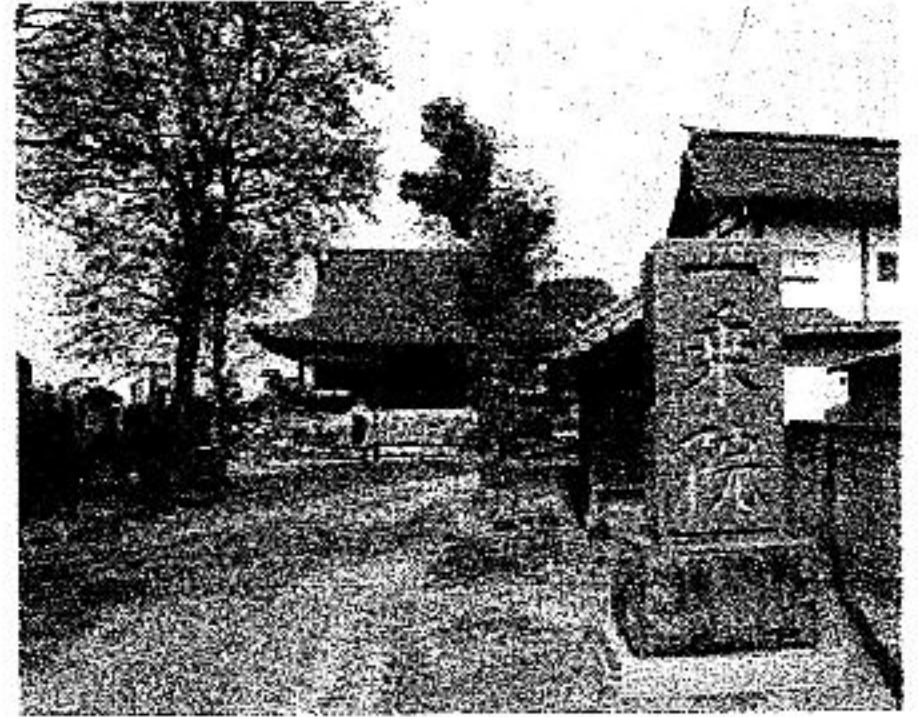


\*加藤幸一氏作成地図を引用

# 1 一乗院 いちじょういん

## ●一乗院（山号稲荷山）

一説には元仁元年（一一二二）源頼朝の妻政子による建立で、開基は弘範上人と伝えられている。本尊は阿弥陀如来。



## ●新編武蔵風土記稿による一乗院の縁起

一乗院の創建年代は不詳であるが、新編武蔵風土記稿に「新義真言宗、足立郡倉田村明星院末、稲荷山と號す、本尊阿弥陀を安ず。鐘樓。明和五年（一七六八）鑄造の鐘なり。」と記載されている。

新編武蔵風土記原稿

（三之宮） 一乗院

新義真言宗、足立郡倉田村明星院末、稲荷山と號す、本尊阿弥陀を安ず。鐘樓。明和五年鑄造の鐘なり。

## ●一乗院の建具（教育委員会資料）（昭和五十九年九月二十七日指定）

三野宮一乗院本堂のうち、板戸や欄間などは、慶長一五年（一六一〇）徳川家康造営になる神奈川御殿の解体資材である。この御殿

の解体資材は、元禄一〇年（一六九七）五代將軍綱吉の生母桂昌院が、真言宗嶋の金剛院（現さいたま市岩槻区末田）に一對の仁王像とともに寄進されたものである。

その後一乗院は幕末期に火災で全焼したが、その再建に当たり、平成十一年旧本堂を解体・再建した時、金剛院がこの資材を一乗院に寄付したものの。

越谷ならびにその周辺では数少ない江戸初期の建具として、また明暦三年（一六五七）の江戸大火で江戸城の二の丸に移された越ヶ谷御殿の当時の建具が偲ばれるものとして貴重な歴史資料といえる。

## ●故埼玉縣巡查田口久五郎之墓碑

明治二十四年に建てられる。

裏面の碑銘によると、明治二十三年の関東洪水の際、元荒川の堤防が決壊し、大道・三野宮の地は洪水に襲われたが、この水を隣村恩間の古堰を切つて落とそうとしたため、恩間の人々と対立した。このとき埼玉縣巡查田口久五郎が中に立って説得にあたったが、激昂した衆人に打たれ殉職した旨が記されている。

往古においては上流・下流において、用水の水論（水争い）による出入りが度々おこつた。

## ●故山口半兵衛先生之碑

大正十一年 に建てられる。

碑銘には、山口半兵衛は三野宮の人で剣道五段、越ヶ谷警察分署の剣道師範を勤め、明治四十年大日本武徳会埼玉支部長を拝命した旨が記されている。



## 2 三野宮香取神社

### ●香取神社

総本社 千葉県香取市香取神宮

祭神

経津主神あつぬしのかみ（鹿島神宮の祭神）

「武甕槌神」とともに、葦原あしはら

の中つ国を平定した、国家鎮護の神・武の神）

三野宮の鎮守で、「二乗院伝記」によ

ると、足利義満の第3子である義教よしのりを

三野宮大明神として祀ったとの伝え

があるが、没年（一四四一）と合致し

ない。また、口碑（言伝え）には、北

条政子が建立したと伝承されているが定かでない。

享保3年（一七一八）の再建後、安政6年（一八五九）に焼失し、

慶応3年（一八六七）に再建されている。現在の拝殿は昭和26

年、本殿は同38年に改築されたもの。本殿には往時の本地十一

面観音が安置されている。

### ●三ノ宮卯之助（高崎力氏資料引用）

・文化4年（1807）ここの三野宮で生まれ、性を向佐むかきといい、御

子孫（向佐家）が越谷市三野宮235番地におられる。三之宮は

出生地名三野宮をとったもの。幼少のころ背の低い小柄な子供で、

まわりから弱虫とからかわれていた。その後、卯之助は体を鍛え、

村一番の力持ちとなる。そしてついに江戸を代表する力持ちとな

り、力持ちの一座を結成し、江戸をはじめ関東周辺から兵庫姫



路まで見せ物興業を行った。（姫路の八幡様に銅像がある）

・天保4年（一八三三）26歳の時、卯之助一座は江戸深川八幡

宮境内にて十一代大將軍家斉の前で上覧の上、栄を受ける。

・嘉永元年（一八四八）41歳で、江戸力持ち番付で東の大関。

・嘉永7年（一八五四）48歳で死亡。江戸で行われた日本一決

定戦で勝利し、祝の帰り道端で突然苦しみだし、悶え苦しんで

その場で亡くなった。死因については食中毒とか、負かした相

手の遺恨を買った毒殺とも言われている。毒殺説と関係あるの

か、子孫宅にある位牌には「到殺清個士とうさつせいこし」と書かれている。

・卯之助に関する残された資料は力石の他、日本一と記された位

牌と、一座を結成し諸国を巡業したときの興行広告に用いら

たとみられる版木だけであるという。

### ●卯之助と力石（高橋力氏資料引用）

・埼玉県内に六十貫（225kg）以上の

力石が60個あるという。

・越谷市内には、49ヶ所に136個。

・最大重量の力石は、桶川市稻荷神社

にある卯之助45歳の奉納時の「大

盤石」610kg。

・神社内で持った力石（41歳の時）

大盤石 三之宮卯之助持之 嘉永元年

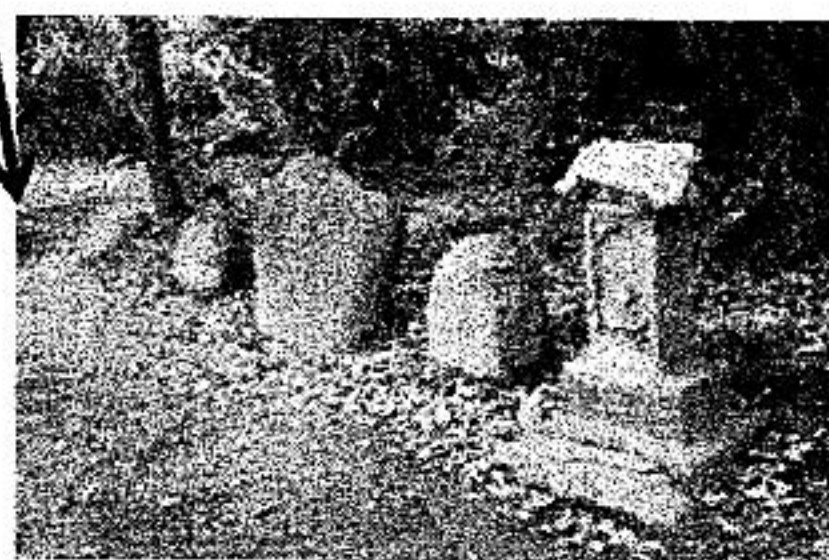
山王石

白龍石 三之宮卯之助持之 嘉永二年

指石

笠付の石塔

「妙見星神筑波山両大権現」





# 江戸持三宮卯助

諸国を巡業した時の興行広告用引札 (チラシ) (高崎 力蔵)

真ん中の下にいるのが卯之助。両足で支えているのが  
 ①舟 ②舟の上に馬一疋 ③その馬の上に三味線を持った役者一人 ④馬引き人足一人



三ノ宮卯之助



### 3 浄山寺（野島の地藏尊）

#### ●浄山寺（山号野嶋山）

野島の浄山寺は、円仁（慈覚大師）創建の天台宗寺院で、貞観二年（八六〇）の創立と伝えられる。寺伝によると、円仁（最澄の弟子―下野生まれ）が日光輪王寺を開祖した時、日光山頂よりスモモの実を投げ、この実が落ち開花した所に一字の堂を造立することを誓って下山した。円仁は野島（越谷市）を通るとスモモが開花していたので、ここに延命地藏の立像を本尊として寺（天台宗慈福寺）を建てた。野島の慈福寺は天正十九年（一五九一）景春和尚のとき天台宗から曹洞宗に、名を浄山寺と改めた。そしてこの年、徳川家康から寺領三石の寄進を受けた。

#### ●本尊の地藏菩薩

また本尊の地藏菩薩が僧侶の姿になって本堂を抜け、村を出歩いていると、茶の木で片方の目を突き刺して片目になったとの片目地藏伝説がある。片目になった地藏尊はお寺の前にある池で目を洗うと、その池に住んでいるすべての魚までが片目になったという。

本尊の地藏尊は、子授け、安産などに御利益があるとされ、毎年二月二十四日と八月二十四日は地藏尊の縁日で、本尊が「開帳され、境内は露店や見世物小屋、芝居小屋などが立ち並び大変賑わった」という。また、この日は地元では特別に農業の休息日にされていた。

3・11大震災において、足を折る災難にあった。早速修復を行ったところ、ゆすると音がするというので調査すると、胎内から年号・仏師などの記録が出てきた。専門家の鑑定では国指定文化財級とのこと。現在国にせず県の指定を受けることにしているという。

#### ●地藏尊の出開帳

江戸時代、湯島天神社などの江戸の町への出開帳も盛んであった。江戸での出開帳が最も多かったのは、成田の不動、次に嵯峨の清涼寺、次に中山の法華寺、次に下野国高田山、そして野島の地藏尊であるという。野島の地藏尊は、関東各地にも出開帳されていた。以上から、野島の地藏尊の信仰は、江戸のみならず関東各地に広がっていた。

#### ●江戸の僧の「十方庵遊歴雜記」より（越谷の歴史物語より）

文化十四年（二八一七）と文政八年（二八二五）の二度、越谷を散策した著き綴り。

筆者が越谷宿豪商「越谷の天下様」塩谷吉兵衛宅に宿し、翌朝吉兵衛の案内でちやうど御開帳の野島地藏尊に案内された。荷足り船（荷を運ぶ船）で船内酒宴を催しながら元荒川を上り、野島村の土橋に着いた。二町ほどの道のりで地藏堂に達する。田舎でありながら開帳の賑わいは江戸と変わらぬ。ただし、九割は近郊の人々で一割が江戸人と見えた。境内には小間物店・人形店・飴屋・菓子屋・そば屋・団子屋・燗酒の類が所狭しと立ち並んでいる。その上、見世物興行の類として、曲搦きの栗餅・独楽（こま）まわし・居合抜の歯磨売り・のぞきからくり・鼠の木札くわえて当りくじにとらせるのや書画の早書き・奉納の義太夫・手品・軽口の豆蔵（まめぞう）に至るまでぎっしりと詰まって人々の足を引き留めている。村々からの金銭、米、醤油、炭の寄進物、内陣の仏具、水引、打敷や銅灯籠などの奉納物がもちこまれ、江戸からの信仰者の奉納、地藏菩薩の奉納人と号する少年少女の奉納なども見える。一行が寺の玄関へ行くと住職の僧が出迎えて座敷に招き入れ、やがて饗応もしいたというのを辞退して舟に戻ったという。

この文のおかげで江戸時代の野島地藏の開帳状況を我々も眼前に浮かべることが出来る。



●鼻紙朱印状（市指定）

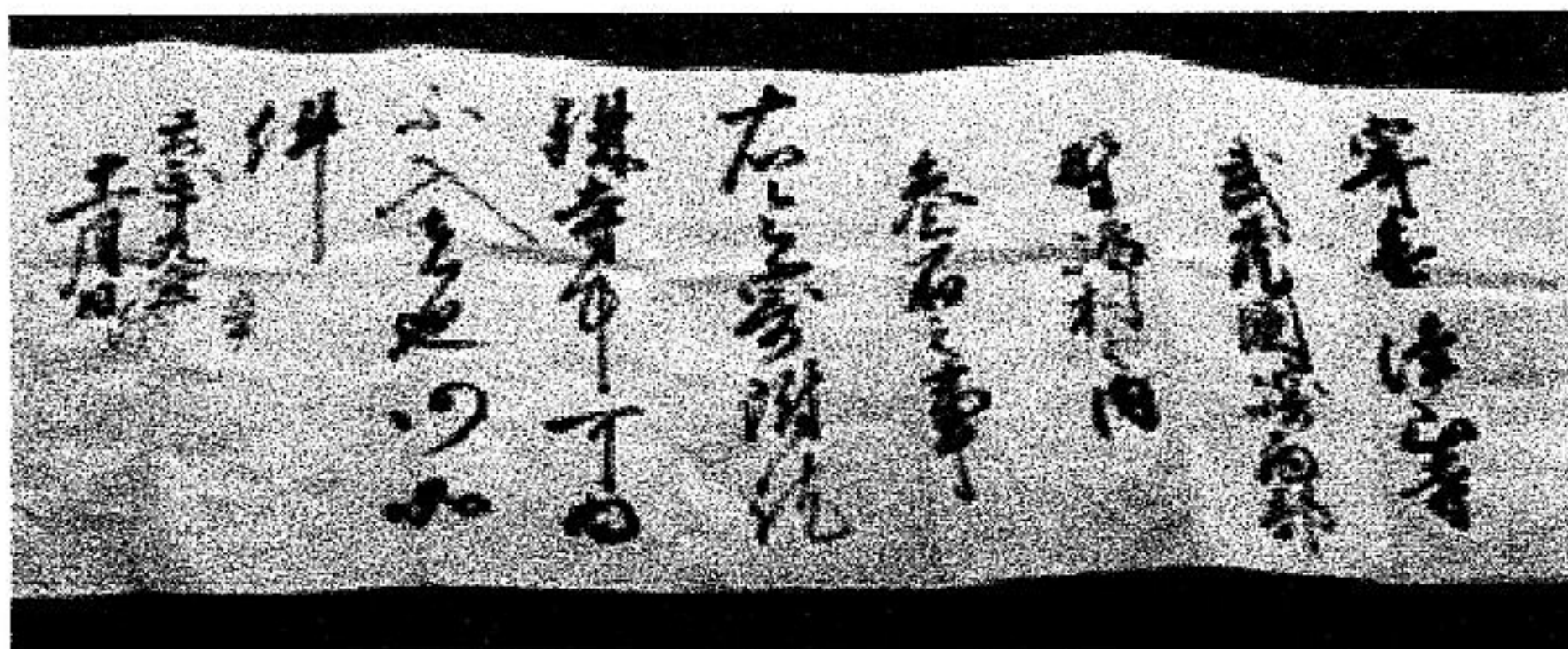
浄山寺は、天正十九年（一五九一）に天台宗慈福寺から現在の曹洞宗浄山寺に改めた。寺伝によると、この年、徳川家康が来て寺領として三百石を寄進したが、この時の住職は過分であるとして辞退する。そこで家康は懐紙（鼻紙）を取り出して、高三石として記し住職に与えた。このため家康から直接もらったとされる寺領高三石の朱印状を「鼻紙朱印状」と呼ばれるようになったという。

\*「朱印状」

寺社領安堵あんどの寄進状の朱印状をいう。

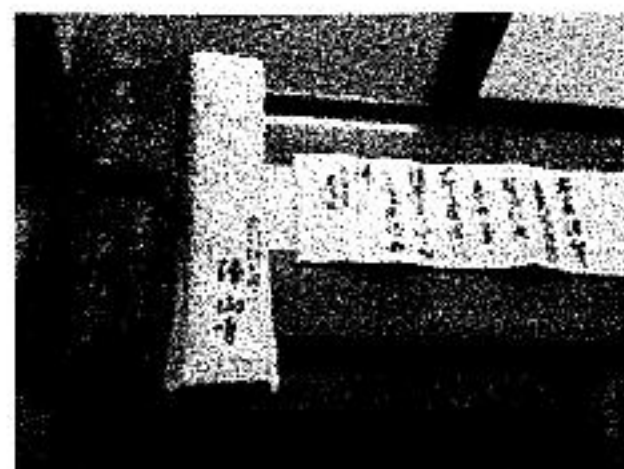
天正一八年（一五九〇）八月一日、関東に入国した徳川氏は、それまで寺社や地侍層が私有していた領内の人民や土地をすべて収公した。このうち主な寺社にはその代わりとして、翌一九年一月、検地のうへ改めて寺社領を寄進した。この徳川氏による寺社領安堵の寄進状を朱印状と称される。朱印状は將軍の代わりごとに発行されたが、徳川一五代のうち、六代家宣（在任三年）、七代家継（同四年）、十五代慶喜（同二年）は在任期間が短かったりしたため発行されておらず、全部そろって十二通である。

明治元年、幕府がたおれ維新政府が樹立されたが、このとき幕府当時の文書は政府に回収されたが、朱印状は戻されなかった。このため写ししかない寺院が多いが、浄山寺と林西寺には秀忠を除き実物十一通が保存されている。



寄進 浄山寺  
武蔵国崎西郡  
野嶋村之内  
参石之事  
右令寄附訖  
殊寺中可為  
不入者也仍如  
件  
天正十九年  
十一月  
卯

武蔵国崎西郡とあり、当時当地域は崎西郡と称され、埼玉郡と記されるようになったのは寛文五年（一六六五）の家綱朱印状からである。







耕雲閣

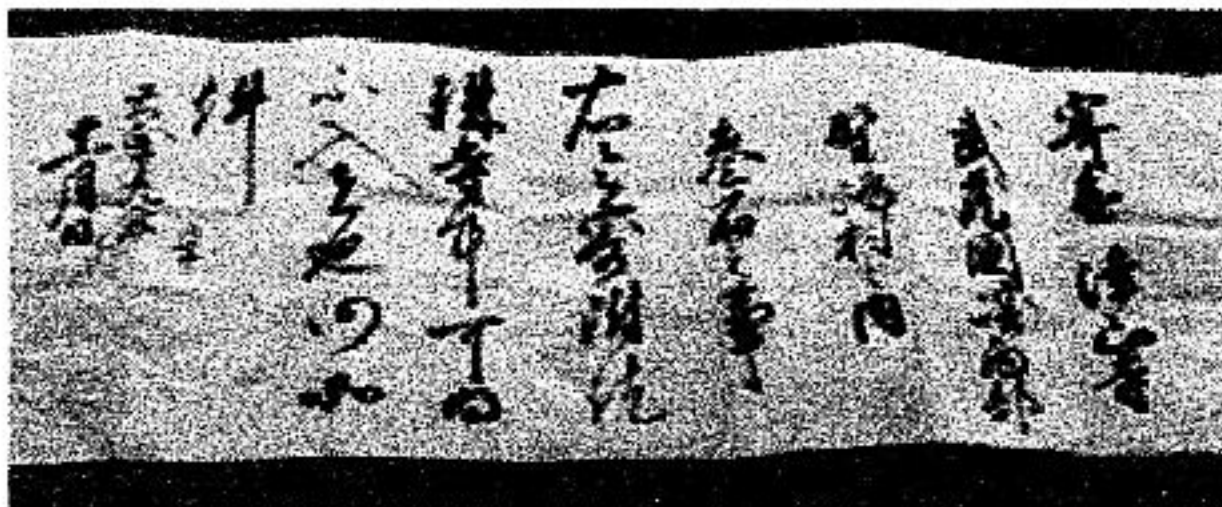


徳川家康像（開府四百年記念）

浄山寺山門



越谷の主なる寺院にあった朱印状はみな明治政府に没収され、下記の三寺のみ現物が残っている。（市文化財）



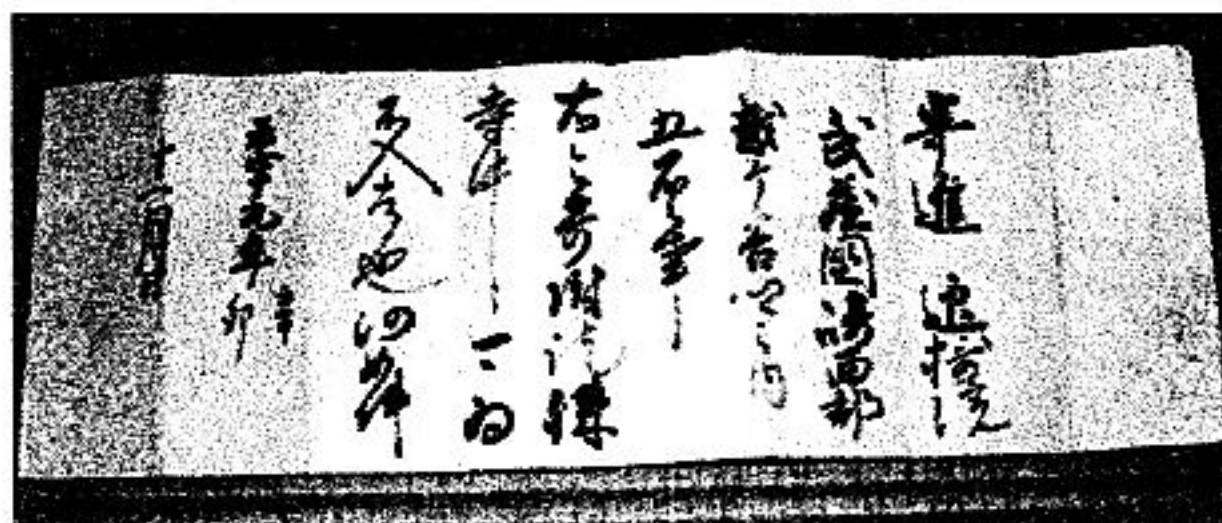
浄山寺寄進朱印状

寄進 浄山寺  
武蔵国崎西郡  
野嶋村之内  
参石之事  
右令寄附訖  
殊寺中可為  
不入者也仍如  
件  
天正十九年 辛卯  
十一月日 印



林西寺寄進朱印状

寄進 林西寺  
武蔵国崎西郡  
平方郷之内  
武拾五石之事  
右令寄附卒殊  
寺中可為不入  
者也仍如件  
天正十九年 辛卯  
十一月日 印



迎振院寄進朱印状

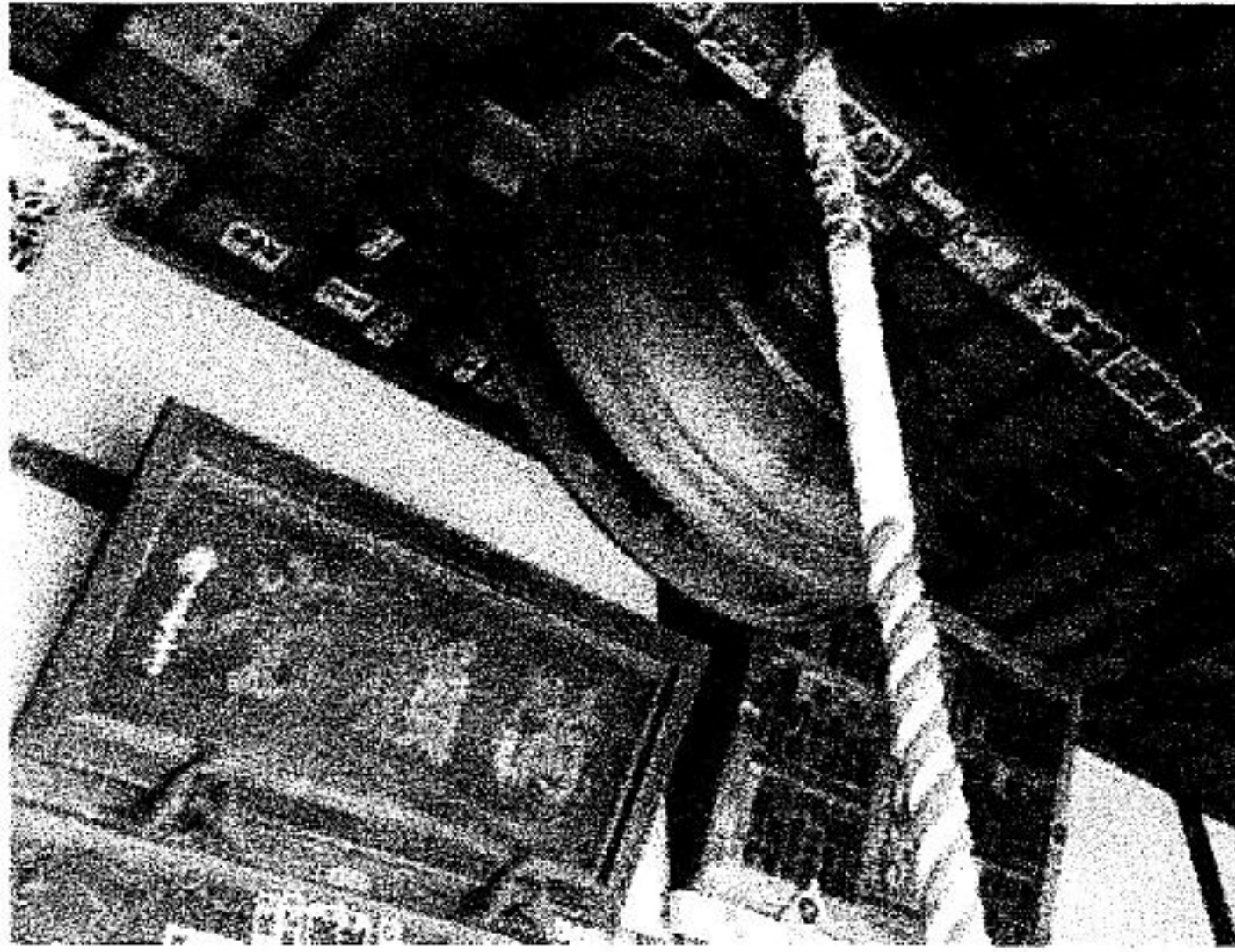
寄進 迎振院  
武蔵国崎西郡  
越ヶ谷郷之内  
五石之事  
右令寄附訖殊  
寺中可為  
不入者也仍如件  
天正十九年 辛卯  
十一月日 印



●巨大な大鰐口おうわにぐち（市指定）（市教育委員会資料より）

浄山寺の大鰐口は、天保十二年（一八四一）に奉納された銅製のもので、直径六尺（一七六cm）、厚さ二尺（六〇cm）、重量二百貫（七五〇kg）という全国でも稀にみる大きさである。

この大鰐口は表面には銘が刻まれており、表側にはこの鰐口の奉納者の氏名が八〇名ほど刻まれている。奉納者を見ると、神田紺屋町・馬喰町二丁目・本小田原町・日本橋青物町・神田豊島町・江戸



橋四日市・芝金杉浜町・大伝馬町・深川冬木町・千住河原町・二郷半領花和田村・竹塚栗原町・粕壁・高野・大門・菖蒲など広範な地域にわたっている。当時浄山寺では、湯島天神や千住慈眼寺の出開帳、熊谷・深谷・太田などへの巡回出開帳を行っており、人々の信仰を集めていたが、こ

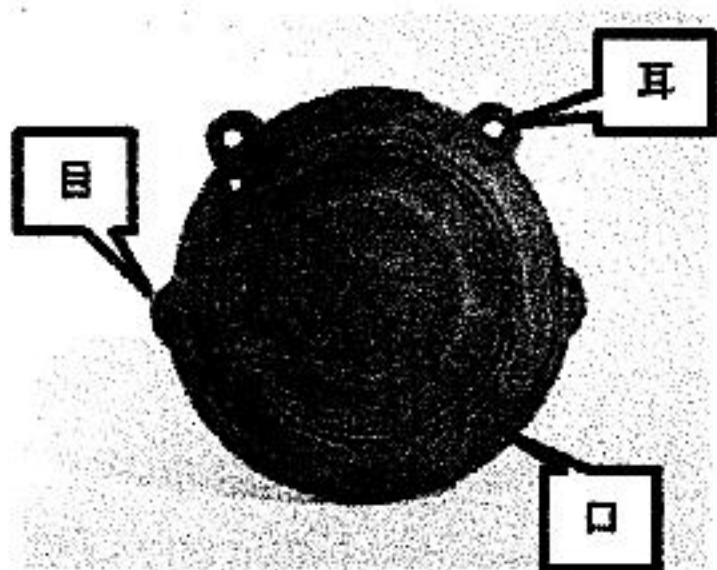
の鰐口はこうした人々の浄財によって造られたことが、この奉納者名から知られる。

また裏側には、奉納のいきさつが刻まれており、要約すると以下のとおりである。

『この鰐口は、江戸四谷全勝寺二十世全達和尚が国家安穩五穀豊穰を祈って発願したが、不幸中途にて他界したため、当山二十一世珉宗和尚その願をみるにしのみず、一般信男信女より浄財を得て、天保十二年二月その願望をとげた』

●鰐口（川崎市教育委員会資料より）

「鰐口」という呼称は、正応六年（一二九三）銘をもつ宮城大高山神社蔵の作例の銘文中に記されるのが初見である。それ以前の鰐口には「金口」「金鼓」といった呼称がみられることから、古くはこのように呼ばれていたのが、鎌倉時代末頃以降、「鰐口」と称されるようになったものと考えられている。江戸時代中期の医家、寺島良安はその著「和漢三才図会」（正徳三年



安はその著「和漢三才図会」（正徳三年一七一三・自序）のなかで「口を裂くの形、たまたま鰐の首に似たるが故にこれを名づくるか」と推察しているが、実際に仰ぎ見る時、このように考えることは十分にうなずける。

鰐口の現存遺例は室町時代以降の作例が多く、それ以前のは少なく、平安時代の作例は数例をみるにすぎない。



## 4 末田の金剛院

### ●金剛院仁王門及び金剛力士像（説明板より）

金剛院は、奈良長谷寺の新義真言宗豊山派に属し、金龍山妙音寺という。開山は僧有慶。初め岩槻にあって金剛坊と称したが、寛政年中（一四六〇～一四六六）に当地に移り金剛院と称した。

天正十九年（一五九一）、徳川家康から寺領一〇石の御朱印を賜り、またかつては常法談林として多くの僧侶を教化し、武蔵国移転寺十か寺の一として由緒ある格式を誇っていた。

仁王門は、元禄十年（一六九七）桂昌院の寄進と伝え、簡素な造りではあるが、三段に組み込まれた垂木や屋根の形などに当時の優雅な名残を伝える建築である。屋根瓦の大部分を失っているのは惜しいが、堂々とした風格をもち、中央に心山和尚の筆になる「金龍山」の門額を掲げる。

門の左右に配された阿吽形の金剛力士像は、共に江戸時代前期の作と思われ、寄木造り、玉眼嵌入、胸上で着手式とし、体幹部は左右二材を基本とし、各々補材を充てている。仕上げは下地漆の上に布着せを行い彩色されている。

阿形は左手に金剛杵を執り、右手を力いっぱい広げて降ろし、吽形は左手を広げて挙げ、右手は強く握って降ろすという一般の形であるが、胸や腕、せなかの筋力の表し方や均整のとれた姿態はこの期のものとしてすぐれた出来栄を示している。

昭和五十六年五月十二日 市指定文化財となる。

岩槻市教育委員会

### ●新編武蔵風土記稿玉編下之巻

金剛院 新義真言宗金龍山妙音寺ト號ス 京都仁和寺末（明治四十四年マデ）ニシテ談林所ナリ 寺領十石ノ御朱印ヲ賜フ 開山ノ僧ヲ有慶ト云 寂年ヲ傳ヘズ當寺古ヘハ岩槻ニアリテ金剛坊トイヒシヲ寛正年中當地ニ移リテヨリ金剛院ト改メ堂塔以下造立スト云 本尊虚空藏ハ長三尺許 弘法大師ノ作ト云

鐘楼 元禄三年鑄造ノ鐘ナリ

仁王門 棟札ニ元禄十年桂昌院殿御寄附ノ由ヲ記ス

護摩堂 不動ヲ本尊トス

經堂 一切經ヲ藏シ十一面觀音ヲ安置ス

### ●山号「金龍山」の由来

元荒川の川上に淵があり、日照りが続いた折、その淵上で雨乞いをしてると一匹の龍が水上に頭を現し、雨を降らせた。ここからこの地を金龍ガ淵と呼ばれ、山号の名がつけられたとある。

### ●上杉謙信寄進の鎧

上杉謙信が関東に入国した際、兵糧にことかき、その時寺で兵糧を差出したことから、お礼として寄進されたという伝承をもつ金箔の「鎧」が残されている。

### ●会田氏出身の住持

近世初頭に至り、越ヶ谷の会田氏（岩付太田氏家臣）出身の名僧尊慶を第7代住持として迎えている。豊山派の有力寺院になったのは尊慶の由縁である。



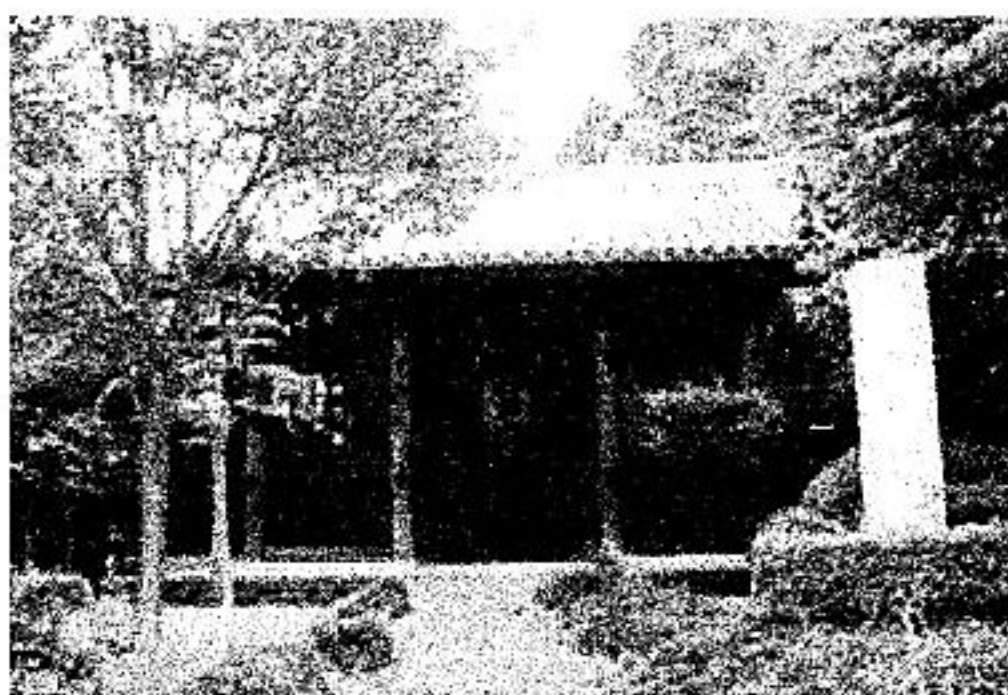
●越谷の金剛寺（末田の金剛院）の名犬（「越谷の歴史物語」より）

江戸の津村正恭という人が、全国各地の珍しい話を書き留めた十五巻になる見聞随筆集「譚海」の巻六に金剛寺の名犬のことが出ている。

『武州越ヶ谷金剛寺という真言宗の寺は、前から白犬二疋をかっており、住持が、宗派の役所である江戸本所の弥勒寺へ所用がある時は、この犬に使いをさせる。すなわち、書状をしたためると、この二疋の犬を呼んで、一匹の首に書状を、一匹の首に銭二百文を結びつけると、二匹は出て行き、二時（四時間）たつと首に弥勒寺の返書を結びつけて帰ってくるのである。ただし、前の晩に、あす使いだす旨を犬に告げ、朝になると白米二升を飯に炊いて与え、それを食べてから出て行く。弥勒寺でもこの犬が着くと、飯を炊いて食わせ、その間に返書を書いて犬の首に結び付けるのである。帰り道、犬は蒲生の辺りの酒屋に立ち寄る。酒屋でもこの犬をよく知っているので、首に結んだ銭をとり、白米二升を炊いて与えると、それを食べて出て行くのである。こうしてきちんときまつた使いをするので、人々も奇特なことだと語り合っているという。』

犬が使いをするということは往々あることであり、この話も越谷が江戸からひどく遠方ではないことから、ありそうな話として人々に傾聴させるものをもっている。飯を食わすことが三度も出て着、しかもそのうち二度も白米二升ということを強調しているのは、話を一層面白くさせる。

ここに出てくる越谷の金剛寺とは、越ヶ谷宿に近かったから、末田の金剛院のことを誤り伝えたものと思われる。



仁王門



仁王の股くぐりという習俗が行われたという「阿形像」



## 5 末田須賀堰と末田大用水・須賀用水

### ●末田須賀溜井

元荒川の水を止めている堰が末田須賀堰で末田須賀溜井という。瓦曾根溜井と同じ頃（慶長十九年頃＝一六一四）に出来たと伝えられている。この堰の末田須賀溜井から末田大用水と須賀用水に水を供給している。そのため末田須賀堰という。また瓦曾根溜井と同様、舟運として溜井の兩岸にそれぞれ末田河岸・須賀河岸があつた。

この溜井で水を止めることにより、下流に瓦曾根溜井（八条用水・西葛西用水・谷古田用水に水を供給）が寛永六年（一六二九）の荒川の瀬替え（これより元荒川となる）もあつて、水不足が発生し、寛永十八年（一六四一）利根川より葛西用水をひくことになる。

明治に入ると竹流と称する石堰・木造堰が、明治三十八年煉瓦造りに、大正十五年

### 末田用水

元荒川の右岸で、野島・砂原・西新井・越巻（現新川町）・七左衛門・大間野を流れて綾瀬川に落とされている。

（二十三ヶ村高約一万一〇四〇石の高割にて、溜井管理修復自普請組合）

野島村・小曾川村・砂原村・後谷村・萩島村・神明下村・越ヶ谷本町・越ヶ谷仲町・越ヶ谷新町・七左衛門村・大間野村・末田村・四丁野村・谷中村・腰巻村・西新井村・高曾根村・黒谷村・野島方村・孫十郎村・尾ヶ崎村・尾ヶ崎新田村・釣上村・釣上新田・長島村

### 須賀用水

元荒川の左岸で、三野宮・大道・大竹・恩間の農地

を流れ、間久里や大里の用水にも使われた。

（二十三ヶ村高約八六二〇石の高割にて、溜井管理

修復自普請組合）

須賀村・大森村・三野宮村・大道村・大竹村・恩間村・恩間新田・大戸村・大谷村・大口村・増永村・大野島村・長宮村・平野村・増戸村・増富村・大枝村・大泊村・下間久里村・上間久里村・大里村・大林村・大房村・大沢町（以上新方領・岩槻領）

### ●定杭

その昔、ここには竹で編んだ堰があり、農業用水を取水していた。用水を下流まで届かせるために堰を高くすると、上流の村々は元荒川に落とす排水が阻害され、湛水（あふれる）被害を受けるので、堰の高さをめぐる争いが長い間続いていた。

寛延3年（一七五〇）にようやく話し合いがまとまり、堰も丈夫な石堰に改築された。其の時に堰の高さを定めた石の杭がこの杭である。

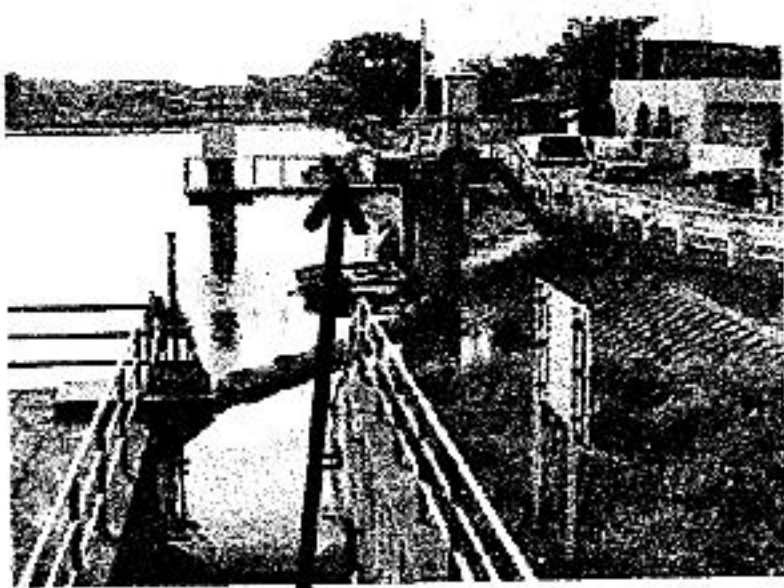
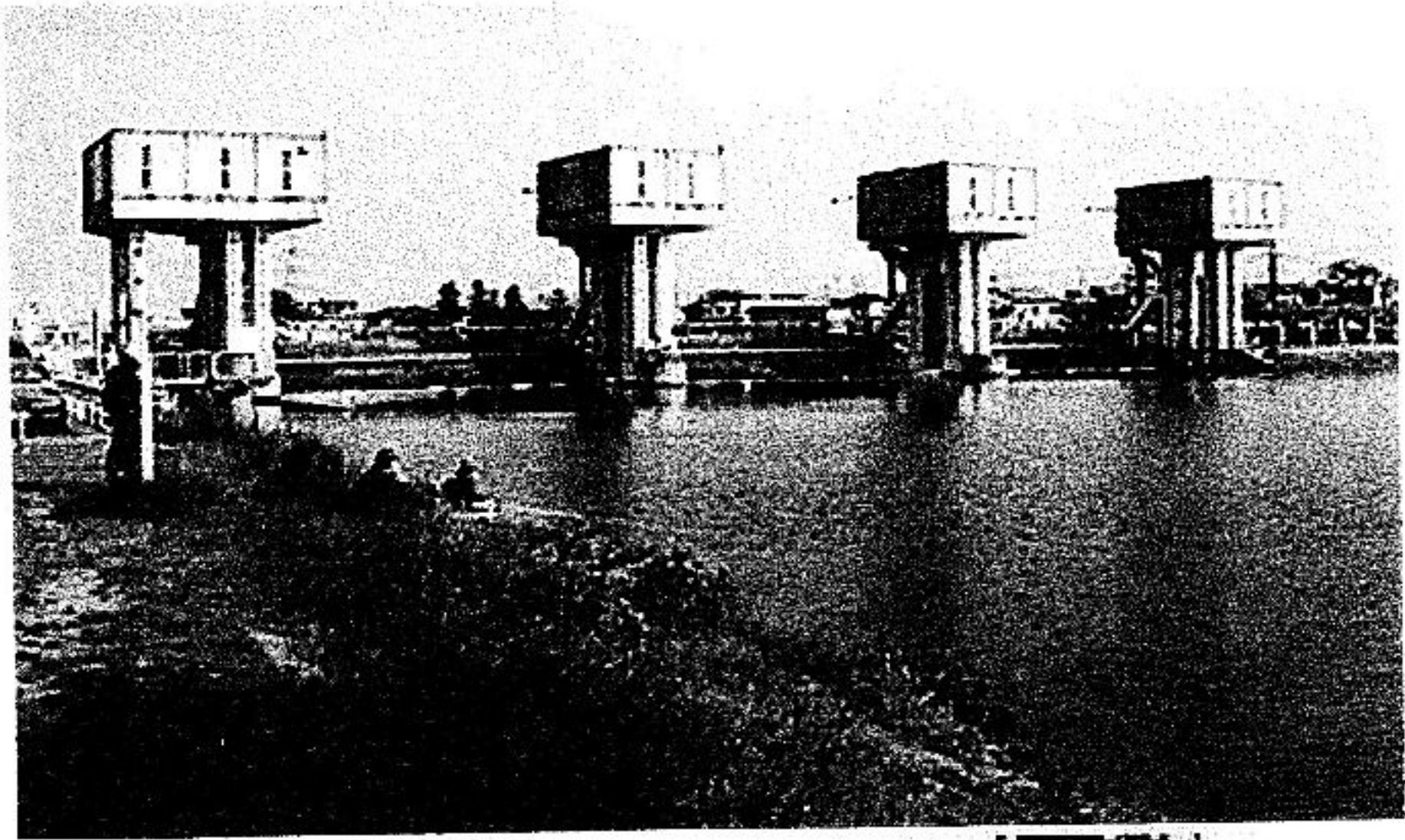
なお、この定杭は平成七年度に県営水環境整備事業により、ここに移設した。



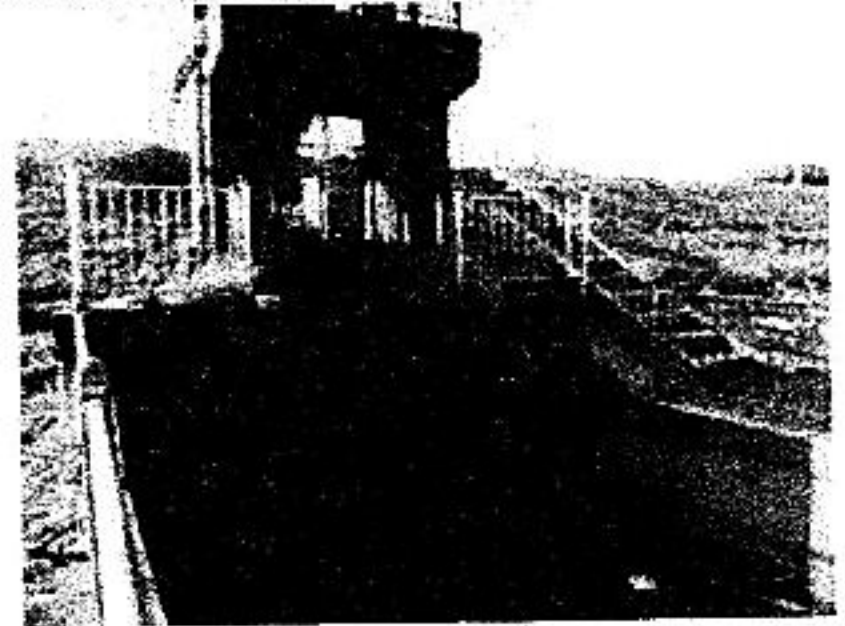
定杭

此定杭頭ヨリ  
石堰上端迄  
八尺五寸下り

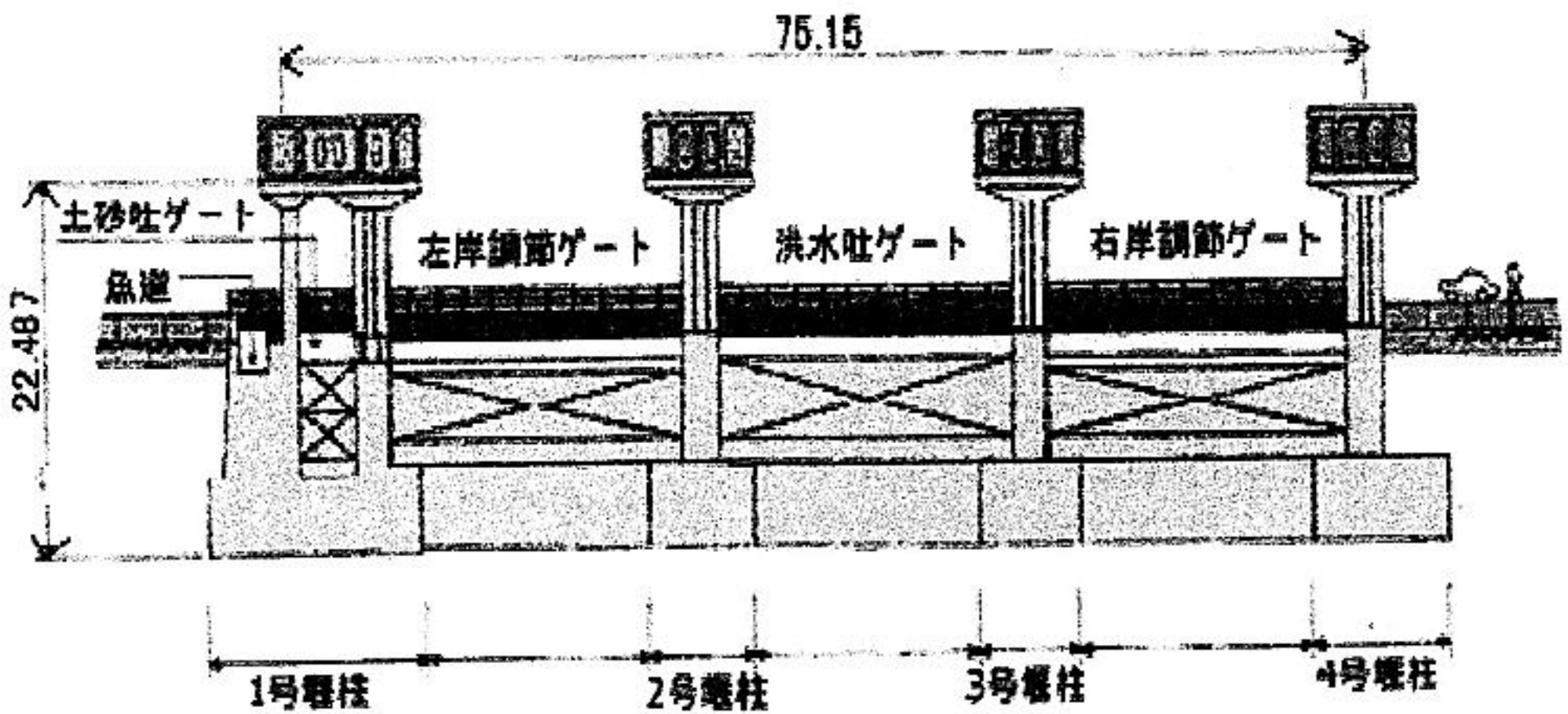




左岸 (須賀用水取水口側)



右岸 (末田用水取水口側)



末田須賀堰ゲート断面図



## 6 武蔵第六天神社（大戸の第六天）

### ●第六天神社

当社創建は、第一一九代光格天皇の御代、天明二年（一七八二、この年より大飢饉・翌年浅間山の大噴火・田沼意次の失脚）と伝えられている。更にその後、寛政二年（一七九〇）に社殿を増築したのが現在の社殿であるという。祭神は面足命・惶根命の二柱。江戸時代は日光街道をそれて、元荒川沿いを通りこの第六天社に参拝したという記録が残されている。神紋は、天狗の葉團扇である。

### ●第六天とは

・仏教では衆生の世界を六道（天道・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄）に分かれる。その天道にも三界（欲界・色界・無色界）があり、その欲界にも六欲天がある。その最上層を第六天（又は他化自在天・第六天魔王とも）という。

・そもそも魔王（天魔）のことで、常に多くの眷属を率いて人間界に於いて仏道の妨げをするといわれているが、お釈迦様が六年間の苦行の末、悟りを開いた時、魔王はお釈迦様に降伏し、仏法を守護する神になったという。

・寿命は甚だ長く、一六〇〇年に及ぶという。

### ●創建の言伝え（「埼玉の神社」より）

・当社の始まりは、その昔、びかびかと光る御神体が元荒川の上流から流れてきたので、村人がそれを川から拾い上げて祀ったところ、この地にあった病患がなくなった。それで、この神様はあらたかな神様だという評判が立って近隣に知られるようになったという。

・もう一つは、その昔、大戸村に堀切力弥という侠客がいて、病人

の面倒をよく見ていた。ある時、元荒川の河畔で草刈りの鎌の先にあたるものがあつた。見ると金色の御神体を納めた木の祠で、不思議に思い自宅で大切に祀っていると、夢枕に第六天神を名乗る白髪の老爺が現れ、秋になるとこの地に悪疫が流行するが自分を奉拝すれば免れると告げた。後、その通りとなり、信仰に精出した自分だけがその悪疫から免れた。是を知った村人も第六天神を厚く信仰し、元荒川堤に小さな祠を建立した。これが第六天社の始まりという。

### ●第六天の鯉「神鯉」

武蔵第六天神鯉は御神慮鯉として往昔より耳の病の方々がお借りして、朝日朝夕第六天神の御名をとえ念じつつ耳をつくこと三度繰り返し行う。平癒の上は二本にして納めする神鯉であります。

宮司敬白

### ●「第六天」の講社

・江戸時代後期には、武蔵の各地に結成され、春になると土手の上をぞろぞろと参詣に来たという。現在は講数五六、講員約五千という。講員は三月十五日から六月十五日の間に参詣し、昔は門前に数軒ある料理屋を宿にした。宿では鰻・鯉・鯰など、元荒川で取れた魚が名物であつたという。今でも門前に鰻屋がある。

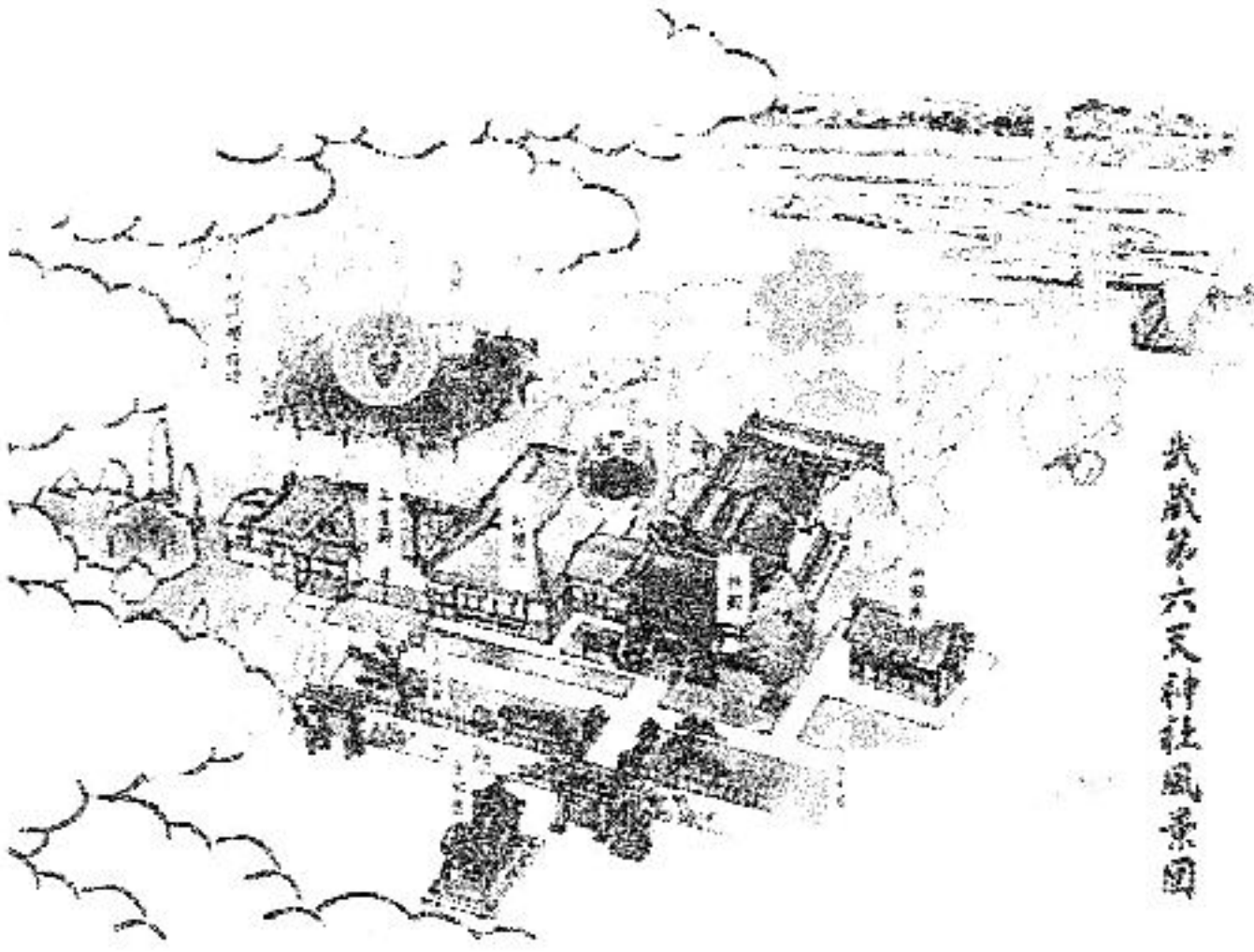
・参詣者への授与品は、神札のほかには赤天狗・青天狗の絵が描かれた絵馬と鯉が有名である。

### ●御神木

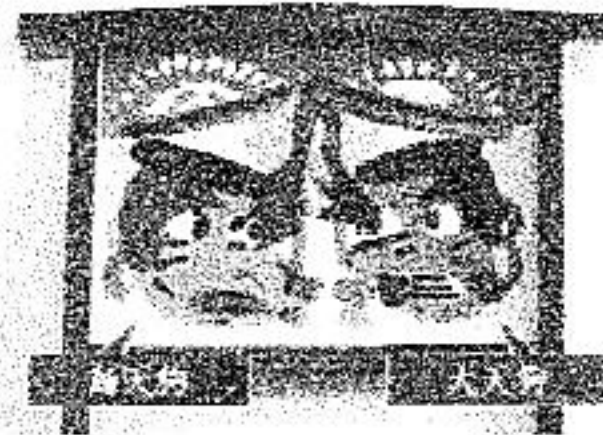
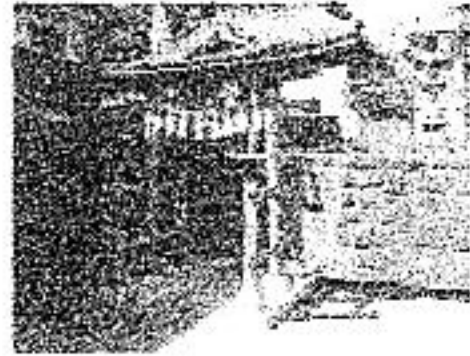
・社殿の中に保存されている御神木は、大天狗・烏天狗が宿り、参拝者に御神徳を授けたと称され、御神木に触れる事を念願として奉拝する人たちが賑わっている。



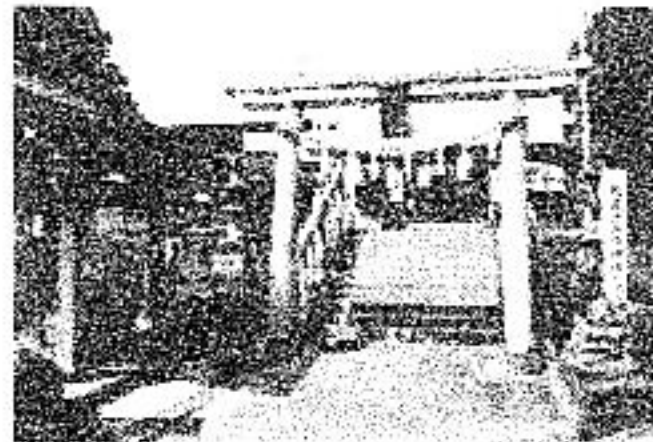
武蔵第六天社



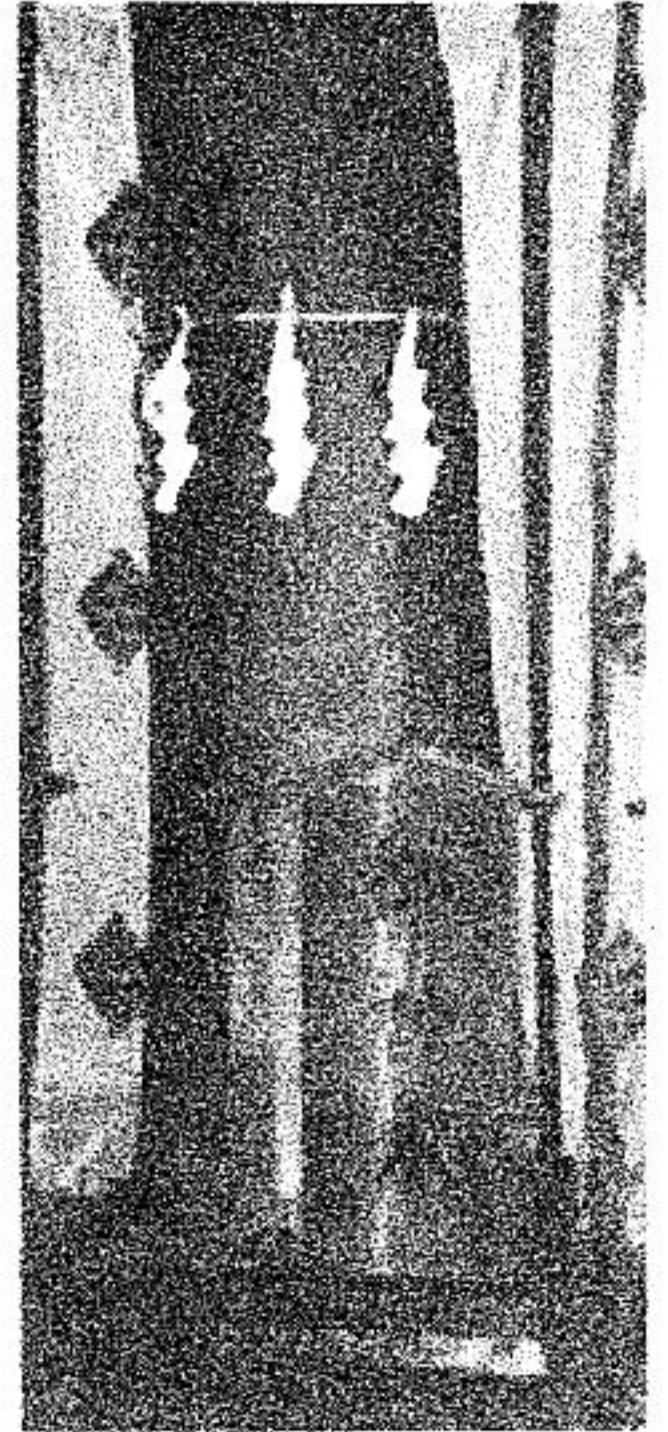
武蔵第六天神社風景図



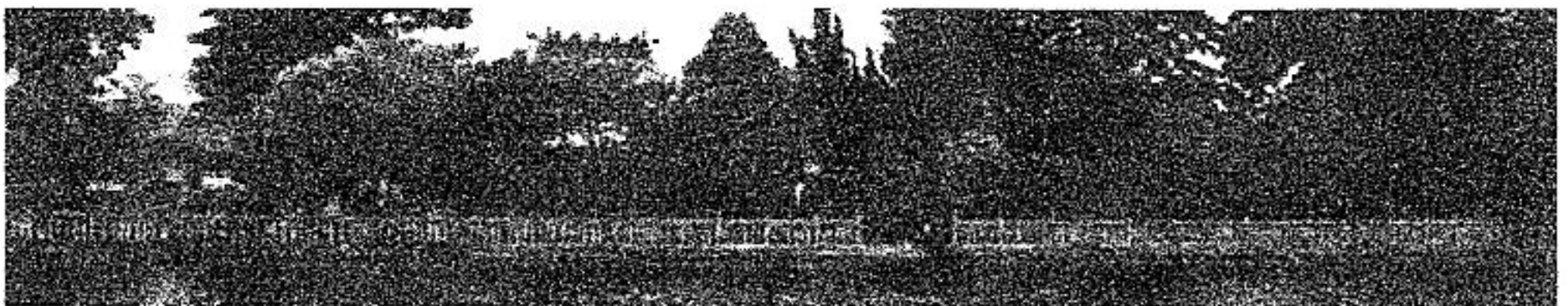
御利益の絵馬



第六天社



御神木



元荒川から臨む武蔵第六天



越谷市文化財

有=有形文化財 建=建築物 絵=絵画 彫=彫刻 工=工芸品 古=古文書 考=考古資料 歴=歴史資料

有民=有形民俗文化財 無民=無形民俗文化財 記=記念物 史=史跡 名=名勝 天=天然記念物 旧=旧跡

地区	番号	指定	種類	名称	所在地	地区	番号	指定	種類	名称	所在地
桜井	1	市	有古	代々の朱印状	林西寺		37	市	有歴	せいぞういん 清蔵院の山門	清蔵院
	2	市	有歴	どんりゅうしょうにんくようほせき 吞龍上人供養墓石	林西寺	川柳	38	市	記天	田中家のクスノキ	個人蔵
	3	市	有彫	あんこくじ 安国寺の円空仏	安国寺		39	市	有建	だいしょうじ 大聖寺の山門	大聖寺
	4	市	有彫	もくぞうあみだによらゆるぎぞう 木造阿彌陀如来立像	安国寺		40	市	有古	ほうじょうしげおきてがき 北条氏繁掟書	大聖寺
	5	市	有古	かほこくし 観智国師書状	安国寺		41	市	有歴	徳川家康の夜具	大聖寺
	6	市	無民	下間久里の獅子舞	下間久里 香取神社	大	42	市	記天	だいしょうじ 大聖寺のタブノキ	大聖寺
	7	市	有民	だいろくてんのさんがく 第六天の算額	個人蔵	相	43	市	有考	じょうおうねんこうしんとう 承応2年庚申塔	個人蔵
	8	市	有民	かんのんどうのえんにちふうけい[えま] 観音堂の縁日風景[絵馬]	大泊観音堂		44	市	有考	てんもん22ねんみださんぞんずぞういたび 天文22年彌陀三尊図像板碑	個人蔵
	9	市	記天	森家のイチヨウ	個人蔵		45	市	有考	ぶんな3ねんろくじみょうごういたび 文和3年六字名号板碑	個人蔵
新方	10	市	記史	しょうじょういんかいざんづか 清浄院開山塚	清浄院	模	46	市	記史	みたかたいせき 見田方遺跡	遺跡公園
	11	市	有彫	もくぞうあみだによらいざぞう 木造阿彌陀如来座像	清浄院		47	市	有考	にじゅういちぶつたいしとうば 廿一仏板石塔婆	金剛寺
	12	県	無民	北川崎の虫追い	川崎神社		48	市	記天	中村家のクスノキ	個人蔵
	13	市	記天	しょうとくじ 聖徳寺のイチヨウ	聖徳寺		49	市	有建	中村家住宅付表門	レイクタウン
増林	14	県	有彫	もくぞうでんまさかんのんほきつざぞう 木造伝正観音菩薩坐像	林泉寺	大	50	市	有彫	香取神社の彫刻	香取神社
	15	市	記天	りんせんじこまどめ 林泉寺駒止のマキ	林泉寺	沢	51	市	有古	本陣資料一括(福井家文書)	県立文書館
	16	市	有工	りんせんじ こうろ 林泉寺の香炉	林泉寺		52	県	記旧	ひらたあつたねかくうあと 平田篤胤仮寓跡	久伊豆神社
	17	市	有彫	どうぞうあみだによらいりゅうぞう 銅像阿彌陀如来立像	林泉寺		53	県	記天	久伊豆神社のフジ	久伊豆神社
	18	市	有考	ぶんめい3ねんじゅうさんほとけいたび 文明3年十三仏板碑	勝林寺		54	市	記史	こしがやござんくひ 越谷吾山句碑	久伊豆神社
	19	市	有考	にじゅういちほとけいたび 廿一仏板石塔婆	個人蔵		55	市	記名	ひさいずじんじゃしゃそう 久伊豆神社社叢	久伊豆神社
	20	市	記天	中村家のイチヨウ	個人蔵	越	56	市	有歴	ひらたあつたねぼうのうだいえま 平田篤胤奉納大絵馬	久伊豆神社
	21	市	有絵	さいとうとよさく 斎藤豊作遺作「風景」	市立図書館		57	市	有工	かけぼとけ 懸仏	久伊豆神社
	22	市	有絵	ちょうぶんさいえいしひつ 鳥文斎栄之筆「瓦曾根溜井区」	市立図書館	ケ	58	市	記天	ラクウショウ	アリタキ園
	23	市	有古	にしかたむらきゆうき 西方村旧記	市立図書館		59	市	有彫	もくぞうしゃかによらいわほんぞう 木造釈迦如来涅槃像	天巖寺
大袋	24	市	有工	じょうじ6ねんななじだいもくいたび 貞治6年七字題目板碑	個人蔵	谷	60	市	有歴	こしがやござんくようほせき 越谷吾山供養墓石	天巖寺
	25	市	有古	いちじょういん 一乗院の建具	一乗院		61	市	有考	けんちょうがねんいたび 建長元年板碑	御殿町
菰島	26	市	有工	のじまじょうざんじのおおわにてち 野島浄山寺の大鑊口	浄山寺		62	市	記旧	越ヶ谷御殿跡	御殿町
	27	市	有古	じやんとん 浄山寺の朱印状	浄山寺		63	市	有古	いなびぜんさしそえしよ 伊奈備前差添書	個人蔵
出羽	28	市	有古	寺領寄進朱印状	迎撰院		64	市	記天	ありたきけ 有瀧家のタブノキ	個人蔵
	29	市	有彫	もくぞうあいたしちざえもんふうふざぞう 木造金田七左衛門夫婦坐像	観照院		65	市	記天	せんげんじんじゃ 浅間神社のケヤキ	浅間神社
	30	市	有彫	せいふくいん 西福院の円空仏	西福院		66	市	有歴	こしがやじゆんせいかい 越ヶ谷順正会関連資料	市役所・図
	31	市	有歴	会田家歴代の墓所	個人蔵		67	市	有彫	どうぞうごちによらいりゅうぞう 銅像五智如来立像	浄光寺
	32	市	有歴	おびしゃさいれいちよ 越巻中新田の産社祭礼帳	個人蔵		68	市	有彫	こうふくいん 弘福院の円空仏	弘福院
蒲生	33	市	有彫	木造地藏菩薩立像	照蓮院	北	69	国	記天	越ヶ谷のシラコバト	越谷市周辺
	34	市	記旧	せんとくまるくようとう 千徳丸供養塔	照蓮院	越	70	市	無民	きやりうた 越谷の木遺歌	市内
	35	市	有歴	窮民救済の碑	照蓮院						
	36	県	記史	蒲生の一里塚	愛宕町						



参考資料

- ・「越谷市の文化財」  
越谷市教育委員会
- ・「越谷の歴史物語」  
同
- ・「越谷ふるさと散歩」  
同
- ・「わたしたちの郷土こしがや」  
同
- ・寺院縁起  
各寺院
- ・「三ノ宮卯之助資料」  
高崎力氏
- ・第312回史跡めぐり資料
- ・その他

## —金剛院について—

- 1) 金剛院は、奈良長谷寺の新義真言宗豊山派に属し、金龍山妙音寺という。開山は僧宥慶、初め岩槻にあって金剛坊と称したが、寛正年中(1460~1466)に当地に移り金剛院と称した。

天正19年(1591)徳川家康から寺領10石の御朱印を賜り、また、かつては常法談林として多くの僧を教化し、武蔵国移転寺11ヶ寺の一つとして由緒ある格式を誇っていた。

仁王門は元禄10年(1697)桂昌院の寄進と伝えられ、簡素な造りであるが三段に組込まれた重木や屋根の形などに当時の優雅な名残りを伝える建築である。屋根瓦の大部分を失っているのは惜しいが、堂々とした風格をもち、中央に心山和尚の筆になる「金龍出」の門額を掲げる。

門の左右に配された阿吽形の金剛力士像は、共に江戸時代前期の作と思われ、寄木造り、玉眼嵌入、胸上で着手式とし、体幹部は左右二材を基本とし、各々補材を充てている。仕上げは下地漆の上に布着せを行い彩色されている。阿形は左手に金剛杵を執り、右手を力いっぱい広げて降ろし、吽形は左手を広げて挙げ、右手は強く握って降ろすという一般的な形ではあるが、胸や腕、背中筋力の表わし方や、均整のとれた姿態は、この期のものとして優れた出来栄を示している。

昭和56年5月12日、市指定文化財となる。

(岩槻市教育委員会)

- 〔2〕 金剛院 新義真言宗金龍山妙音寺ト號ス 京都仁和寺末(明治44年マデ)ニシテ談林所ナリ 寺領十石ノ御朱印ヲ賜フ 開山ノ僧ヲ宥慶ト云 寂年ヲ傳ベズ當寺古ヘハ岩槻ニアリテ金剛坊トイヒシヲ寛正年中當地ニ移リテヨリ金剛院ト改メ堂塔以下造立スト云 本尊虚空藏ハ長三尺許弘法大師ノ作ト云

鐘樓 元禄三年鑄造ノ鐘ナリ

仁王門 棟札ニ元禄十年桂昌院殿御寄附ノ由ヲ記ス

護摩堂 不動ヲ本尊トス

經堂 一切經ヲ藏シ十一面觀音ヲ安置ス

(『新編武蔵風土記稿埼玉編 下之巻』-516頁)

- 〔3〕 金剛院 第七世 尊慶僧正について

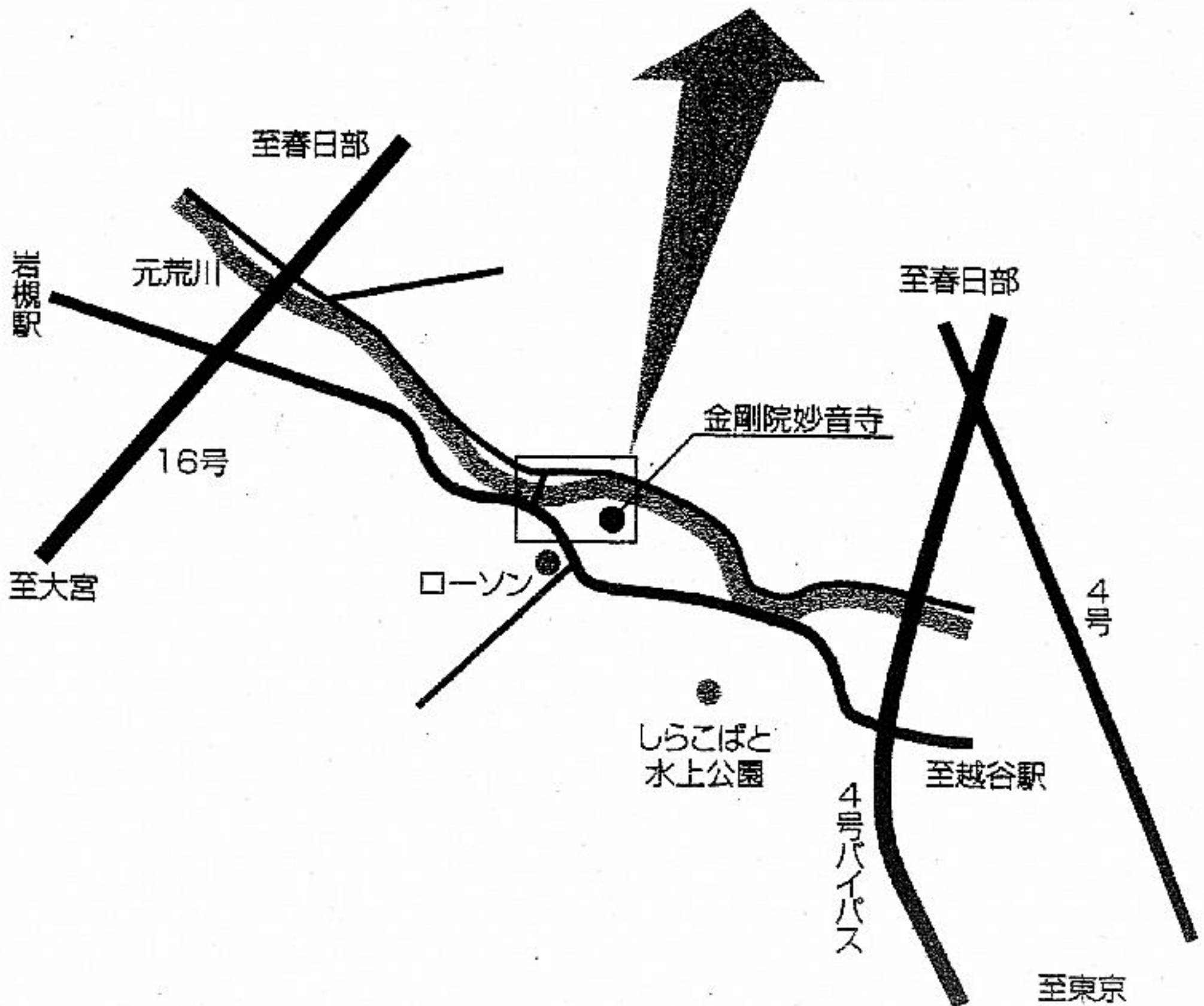
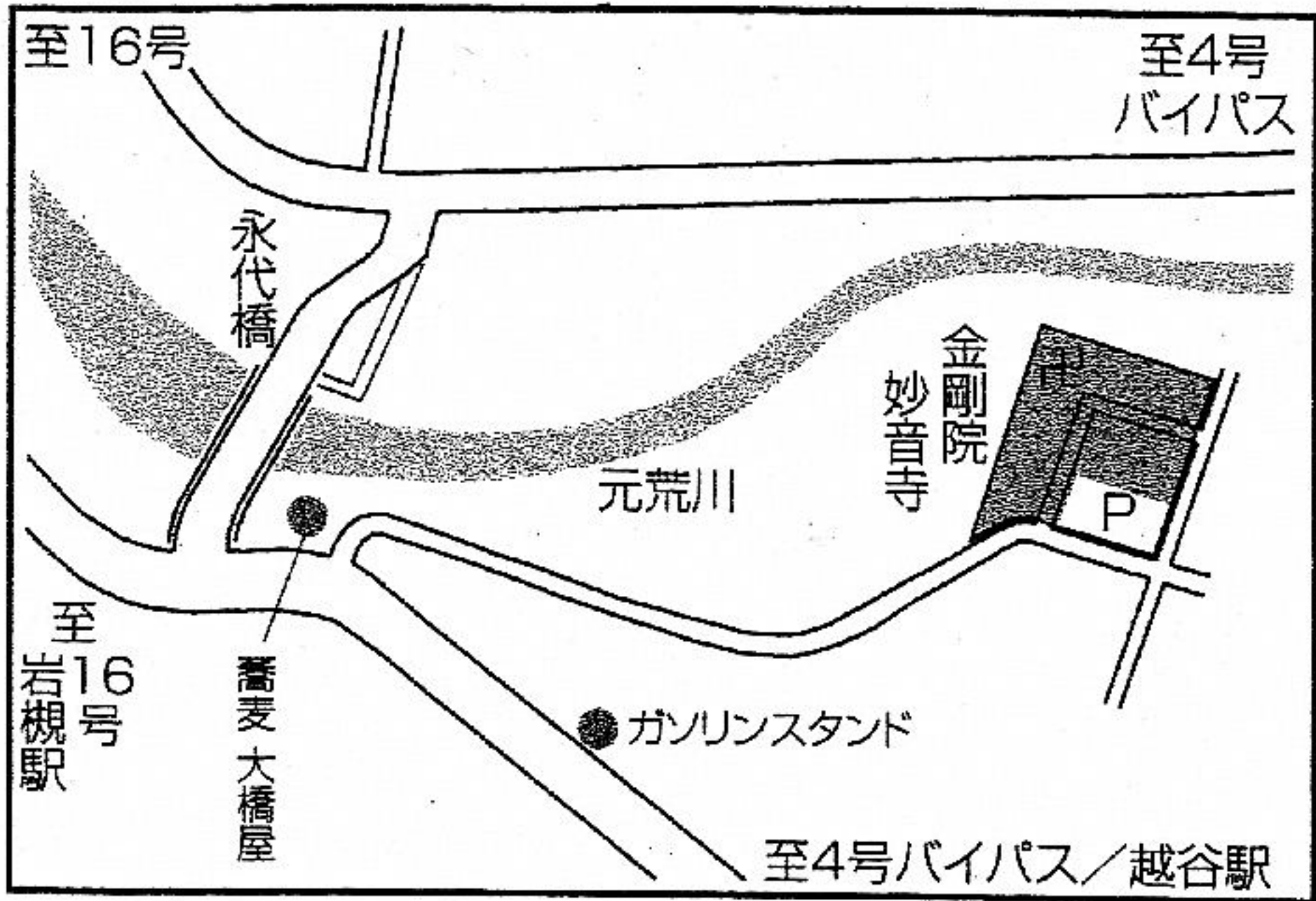
字は頼心、姓は会田、長谷寺五世。武蔵の人、13歳、中島金剛院尊阿に師事し、兩部灌頂を受け、多年、智山日譽に受学し、元和2年(1616)南都に俱舎・唯識等を学び、同4年、醍醐光台院亮濟に兩部大法・諸尊儀軌等を受伝した。寛永元年(1624)金剛院で賢尊から広沢流を相承し、同10年、大覚寺尊性に許可灌頂を受け、広沢流を極めた。同年より越後高田の毘沙門堂に住したが、同12年、賢尊寂後、金剛院を継ぐ。同15年、再び智山に元寿の許で研究し、同18年、豊山4代秀算の委嘱で能化職。幕府の庇護を受けて豊山造営に尽くす。門下に宥重・尊鏡・尊如。

(佐和隆研編『密教辞典 全』法蔵館-452~453頁)

### 参考文献

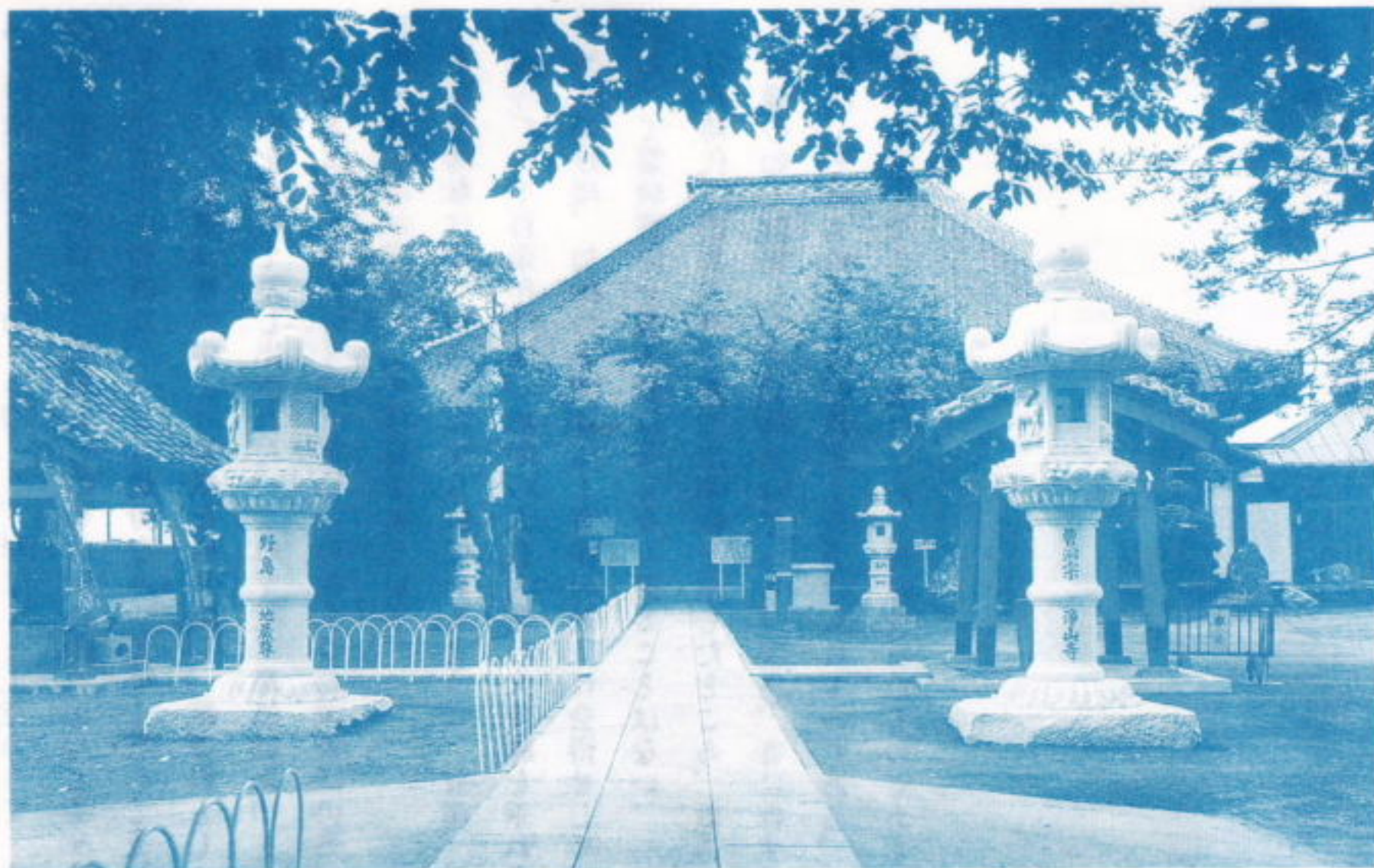
- 埼玉縣史編纂事務所 埼玉叢書第三 三明社 ○角川日本地名大辞典 編纂委員会 委員長竹内理三  
○越谷市史一通史上 ○岩槻市史 通史編 ○新編埼玉県史 資料編10 近世1



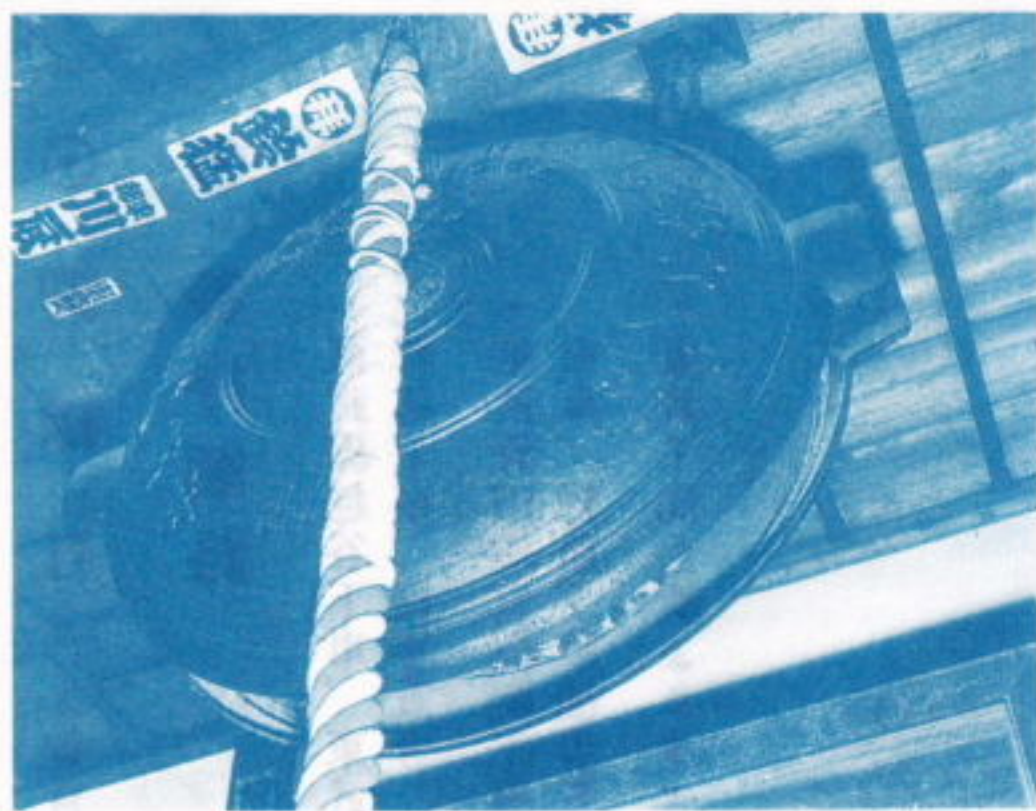




開闢千百餘年関東屈指の古刹靈場



野島山地蔵尊全景



〔日本一大鰐口〕

諸新聞ニ掲載サ

レシ当山日本一

大鰐口ノ写真

厚サ六〇センチ

直径一八〇

センチ

此ノ鰐口ハ江戸四谷全勝寺二十世全達和尚ガ国家安穩五穀  
豊饒ヲ祈ツテ発願セシモ不幸中途ニ於テ他界セシ為当山二  
十一世珉宗和尚其ノ癡願ヲ見ルニ忍ビズ一般信男信女ヨリ  
浄財ヲ得テ天保十二年十二月其ノ願望ヲ遂ゲ畢ル

(鰐口裏面ノ記載文)



# 野島山地蔵尊案内

埼玉県越谷市野島三二番地 曹洞宗浄山寺

電話 〇四八—九七六—五六四六





# 野島山地蔵尊案内

埼玉県越谷市野島三二番地 曹洞宗浄山寺

電話 ○四八—九七六—五六四六

## 野島地蔵尊略縁起

野島山に安置してある本尊延命地蔵尊は、人皇第五十六代、清和天皇の貞観二年、今より一千百多年前、天台宗の高僧、慈覚大師、一刀三礼の御作である。

浄山寺は元天台宗に属し、慈福寺と称していた。天正十九年、東照神君、越谷辺御放鷹の時、本尊靈験を聞き召されて御参拝あり。

「この地、靈にして山うつ密とし、浄し」と上意ありて、寺領三百石の御朱印を賜り、曹洞宗に改め、野島山浄山寺と命ぜらる。

時の住僧明山和尚は、「こは過分なり」と堅く辞して受けなかつたので、家康は袖の中より鼻紙を取り出し、献香料として三石を賜う由を書いて差し出された。これを世に鼻紙御朱印として、多くの人に知られている所である。現在もこの御朱印の外、歴代將軍の御朱印が寺宝として保存されている。

本尊地蔵尊は早くから人に知られているように、安産、子育て、子授等で一千百余年の間、無限の大慈大悲の大誓願を垂れさせられ感応の妙理、加持の幽義は広く有縁の衆生に会得せしめ、これによって靈験感応を蒙る者は昔も今も異なることはない。

江戸時代、湯島天神に於て出開帳を催したところ、数万の参詣人が蟻の如く群集したと記録されている。現在、寺に存する奉納品の内、その当時のものが数多く見受けられるのである。現在の本堂は文久二年に焼けたあと再建されたものである。

### ◎ 越谷市指定文化財

一、藤原和泉守作  
唐金大鰐口カラカネ ワニグチ（工芸品）

一、徳川家康公鼻紙朱印状外  
歴代將軍朱印状十一通（古文書）

### ◎ 御 靈 験

安産・子育て・子授

### ◎ 開 帳

二月二十四日（年二回）

### ◎ 御 縁 日

毎月二十四日

### ◎ 参 拝 順 路

- ・東武線越谷下車、東武バス岩槻行乗車  
野島下車、徒歩五分
- ・東武野田線岩槻駅下車東武バス越谷行  
乗車、野島下車徒歩五分
- ・東武千間台駅よりタクシー五分



## 読書の秋、越谷についての本のご紹介

爽やかな秋は読書の秋、文化の秋でもあります。ちょっと前の本であったりもしますが、「越谷」に関連した本をご紹介します。

**江戸絵画の不都合な真実 狩野博幸著 筑摩新書 2010.10刊 1800円＋税**

東洲斎写楽の項に、「法光寺に過去帳のある阿波候能役者・斉藤十郎兵衛が写楽であることは間違いなく、その法光寺は、いま越谷に移転している」と書かれています。

**(写楽の隣には越谷出身の渡辺多勢子を養女にした国学者・村田春海が住んでいた)**

著者は京都国立博物館を経て、現在、同志社大学教授。江戸絵画の専門家。

**新・古着屋総兵衛3 日光代参 佐伯泰英著 新潮文庫 H24.3刊 630円＋税**

時代もの小説を量産されている著者の「新・古着屋総兵衛シリーズ」第3巻は、日光街道が舞台。登場人物は越谷宿の「あらかわ屋」で美味しい「越谷の鰻」を食べます。

**お鬚番承り候シリーズ(1~4) 上田秀人著 徳間文庫 2010.10-2012.4刊 各巻630円＋税**

越谷そのものは、出てきません。しかし、主人公は、越谷御殿の最後の利用者であり、明暦の大火で江戸城が炎上した際に、御殿を江戸に運んでいってしまった徳川家綱です。この物語が進行するのと同様平行で、越谷でも人たちが生活し、日光街道を往来している人たちがいたということをお忘れなくお伝えさせていただきます。

## 文化の秋、越谷の市民文化祭へ、ぜひ

例年11月に行なわれる文化祭。今年は22日(木)から25日(日)まで。南越谷・ダイエー東側の越谷コミュニティセンターが会場です。当会の出品は次のとおりですが、ほかに手芸、華道、俳句、川柳などの展示、ホールでの舞台芸術など、越谷の文化水準のすべてが見られます。ぜひ、お足をお運びください。

### ◎郷土史部門の出品

○大谷達人「ぎょうだい様建碑の経緯」○加藤幸一「知られざるB29の綾瀬川周辺墜落」○金子 寛「宝永の富士山噴火」○高崎 力「越谷の張子」○秦野秀明「越谷型青面金剛像庚申塔」○原田民自「はとバスが越谷市内を走る」○宮川 進「二百年前の越谷、俳画の世界」

### 年内の史跡めぐりなどの予定は？

○11月14日(県民の日)大間野中村家・開館6周年記念イベント「昔遊びとお団子づくり」  
○11月27日(火)バス史跡めぐり「真壁・益子」○12月8日(土)史跡めぐり「皇居東御苑・東京駅」○12月9日(日)小学生対象・お正月飾りづくりイベント・於大間野中村家

＝上記についてのお問合せはTEL&FAX 048-975-9139 宮川まで＝